

ハワイ・北米における日本人移民および 日系人に関する資料について (5)

神 繁 司

はじめに

I. 外交史料 (外務省資料)

- [1] 外務省記録
- [2] 日本外交文書
- [3] 領事報告
- [4] その他

II. 府県庁等地方公文書・県史等地方史誌

- [1] 地方公文書
- [2] 地方史誌

III. 統計・名簿・名鑑・年表

- [1] 統計
- [2] 名簿・名鑑
- [3] 年表

(資料番号: 1-153, 以上第47号)

IV. 文献・史資料目録

- [1] 各機関所蔵目録
 - (1) 国内諸機関所蔵目録
 - (2) ハワイ・アメリカ諸機関所蔵目録
 - (3) カナダ諸機関所蔵目録
- [2] 邦語文献目録
- [3] 欧文文献目録

V. レファレンス・ワーク

- [1] 辞典・事典
- [2] 参考図書

(資料番号: 154-264, 以上第48号)

VI. 概説書

- [1] 研究史
- [2] 通史・概説書
 - (1) 移民政策・移植民論
 - (2) 通史・概説
 - (3) 資料集・叢書

(資料番号: 265-447, 以上第52号)

Ⅶ. 新聞

[1] 概説

(1) ディレクトリー

(2) 概説書

(3) 新聞人の評伝・研究論文

[2] ハワイ

[3] アメリカ本土

[4] カナダ

[5] 国内発行新聞の記事集成等

(資料番号：448-567, 以上第54号)

Ⅷ. 雑誌 — 明治・大正期における移住民奨励・情報誌等を中心として —

[1] 移住民奨励・情報誌類

(資料番号：568-588, 以上本号)

[2] 主要総合雑誌

付表：移民地で発行された主要雑誌一覧

(次号掲載予定)

本稿の連載も今回で5回を数える。初載から既に6年という月日を費やしているものの、国内の博士論文・(文部科学省)科学研究費補助金研究成果報告書等の特殊文献、アメリカ議会の公聴会記録・アメリカ国立公文書館所蔵文書等々、なお収録すべき資料群も多い¹⁾。加えて、既収資料の書誌事項訂正やこの間に刊行・発表された主要な資料の追加など、加筆・訂正すべき点もまた多々残されている²⁾。いずれにせよ、誌上に架空の「移民関係資料室」を構築するという、本稿の当初の目的を完遂することが、筆者早急の責務であることには違いない。

また、国立国会図書館では、平成14年度における国立国会図書館関西館の設置と国際子ども図書館の全面開館に伴い、組織及び資料配置の再編成がなされた。移民関係資料についても、「岸」(アメリカのアジア系移民資料)「楡木」(ブラジル移民資料)「山本」(ハワイ移民資料)などのコレクションをはじめとする、特別資料室所管の日系移民関係資料群が、平成14年3月末の閉室に伴い、憲政資料室(東京本館)へ移管され、洋雑誌・国内の博士論文・(文部科学省)科学研究費補助金研究成果報告書が関西館の所管となっている。更に、平成15年度からの東京本館改修、専門資料室の統廃合(平成14年度に一部実施済み)に伴い、現法令議会資料室所管の公聴会記録等アメリカの議会資料及び法令資料等は、平成16年度以降は、議会官庁資料室(東京本館)での提供となる予定である。

本稿(1)～(4)を参照される場合は、これらの変更点に留意されたい。いずれ機会があれば、内容の再構成を含め、全面的な改訂を望むものである。

VIII. 雑 誌

一 明治・大正期における移殖民奨励・情報誌等を中心として一

「VIII. 雑誌」では、明治中期の「移殖民論」「渡米論」³⁾ 隆盛期に発行された移殖民奨励・斡旋団体の機関誌類、近代日本の国民世論形成に大きな役割を果たした総合雑誌など、明治・大正期における主要な史料の雑誌を収録する。また、「資料検索でもっとも厄介な作業の一つ」であり（前掲坂田278.『資料集 解説・資料編』p.77）、「これらの雑誌に掲載された（南洋関係の）記事をたんねんにひろう作業が必要である」（矢野暢『「南進」の系譜』中央公論社、1975、p.207（中公新書）＜A99-Z-57＞）、明治・大正期の雑誌記事の検索手段の一つとして、【目次・総索引】類を収録した。ハワイ・アメリカ本土・カナダで日本人移民及び日系人が発行した雑誌については、その多くが国外の図書館等に偏在し、かつ断片的であること、そのため十分な情報が得られないため、一表として付すにとどめた。頁数の関係上、本号ではこのうち [1] 移殖民奨励・情報誌類の部分を掲載し、[2] 総合雑誌については次号掲載の予定である。また、「注」で例示した、移民論一般・日本人移民・日系人等に関する研究論文・記事が掲載されることの多い国内外の研究誌・研究機関誌・紀要類・一般雑誌及びその検索法の詳細については、稿を改めて収録することにした⁴⁾。

史料としての雑誌については、資料（史料）そのものが散逸しているという状況は同じであるにもかかわらず、前稿（『参考書誌研究』No.54、pp.79-128）で収録した日系新聞の研究に比べ、雑誌一般としても、個別移民研究の分野においても、その研究が活況を呈しているとは言えない。「社会の木鐸」としての新聞といわゆる「雑誌」というものへの、意識の向け方の差異であろうか。しかし近年、雑誌のテキストに基づいて、その受容過程、読者レベル及び世論形成に着目した、優れたメディア論が台頭し始めている。移民とメディアとの関わりにおいても、更なる研究が期待されるところではある。

[1] 移殖民奨励・情報誌類

移殖民（渡米）奨励機関の研究は、榎本武揚が中心となった明治前半期の「殖民協会」（1893.3、明26設立）、中期の片山潜「渡米協会」（1902.4、明35設立）及び高貴兵太夫「日本力行会」（1897.1、明30「東京労働会」設立、1900.9改称）に集中しているという（前掲199.『日本の移民研究—動向と目録』p.37）。ここでは、これら三団体の機関誌をはじめ、主な機関誌・情報誌類を収録し、その掲載記事等によって、各移殖民機関・団体設立の経緯、活動状況及びそれをめぐる人々について、当時の時代・社会状況を踏まえて記述する。各機関・団体及びその機関誌に関する参考文献については、原則として「注」に纏めて収録した。

下掲資料のうち、国立国会図書館で所蔵していないもの及び部分的にしか所蔵していない資料で、移民研究のうえで重要だと思われるものについては、NACSIS Webcat ほかで確認した書誌事項によって補記し、併せて国立国会図書館所蔵の期間を記した。また、各雑誌の【目次・総索引】については、原則として本文中に収録したものは除き、全号採録のものを収録した。但し、なお重要だと思われる資料については、注記を加え収録した。東京大学法学部附属近代日本法政史料センター明治新聞雑誌文庫（以下「明治新聞雑誌文庫」と略記）⁵⁾で所蔵する「主要な」雑誌の目次を復刻収録する、『東京大学法学部附属明治新聞雑誌文庫所蔵雑誌目次総覧』全150巻、大空社、1993-98（明治新聞雑誌文庫所蔵雑誌目次総覧複製）〈UP54-E10〉については『明治新聞雑誌文庫目次総覧』と略記し、出版者・出版年及び国立国会図書館請求記号を省略した（以上[2]についても同じ）。本『目次総覧』のうち、145-150巻は「索引編」となっている（145巻：雑誌別著者名索引 総合・経済／146巻：雑誌別著者名索引 哲学・思想・宗教・憲政・教育／147巻：雑誌別著者名索引 医学・衛生・科学・工業・農林・水産／148巻：雑誌別著者名索引 文芸・芸術・風俗・子供・青年・婦人／149巻：雑誌別著者名索引 地理・歴史・交通・警察・軍事・外交・スポーツ／150巻：雑誌別発行年月日一覧）。併せて活用されたい。

また、1983年12月末までに作成された各雑誌の総目次（2年以上にわたるもの）の所在について、天野敬太郎・深井人詩共編『日本雑誌総目次要覧』日外アソシエーツ、1985〈UP54-25〉、1984年以降1993年末までの補遺として、深井人詩・田口令子共編『日本雑誌目次要覧—1984～1993』日外アソシエーツ、1995〈UP54-E14〉、及び国立国会図書館が所蔵する雑誌等については、『国立国会図書館所蔵国内逐次刊行物総目録・総索引一覧—平成7年1月現在』国立国会図書館、1995〈UP54-E15〉を参照されたい。

568. 『殖民協会報告』殖民協会、1-68号：明26.4-32.6、以後569.『殖民時報』と改題
 〈雑22-11〉〈YA-46〉
569. 『殖民時報』殖民協会（568.『殖民協会報告』の改題、巻次を継承）、69-100号：明32.8-35.11、国立国会図書館所蔵は69-86号：明32.8-34.3
 〈雑22-11〉〈YA-46〉
570. 殖民協会編『殖民協会報告』全13巻、1-100号：明26.4-35.11、不二出版、1986-87（568.569の複製、69-100号のタイトルは『殖民時報』、別冊：『殖民協会報告』解説・総目次・索引）
 〈Z3-2073〉

「殖民協会」は、明治以降の民族膨張的「移植民論」の昂揚及び北米への日本人移民制限の兆しを背景とし、人口・貧困問題の予防解決策の一翼をも担うものとして、1893年3月（明26）に設立された。国際情勢に精通した榎本武揚（1836：天保7-1908：明41）を会長に、その人脈の下、著名な政財界人・文化人が評議員となり運営され⁶⁾、1897年3月、メキシコ（チアパス州ソコヌスコ郡エスクイントラ村）への、いわゆる「榎本殖民」が行われた。しかし、殖民

はわずか3ヵ月で失敗に終わり、1900年には榎本は殖民計画から完全に手を引くこととなった⁷⁾。

『殖民協会報告』は、殖民協会の月刊機関誌。第69号(明32.8)より『殖民時報』と改題され、第100号(明35.11)までが現存するが、最終号については不明である⁸⁾。『殖民協会報告』及び『殖民時報』の資料的特色については、570.複製版「別冊」の児玉正昭による解説が簡にして要を得ている。『殖民協会報告』の掲載記事は、大別して①論説・論談②調査報告・探検談③移住適地に関する参考資料④雑録⑤会報に分けられ、移民調査報告・探検談に重点が置かれていたが、『殖民時報』となってからは、論説・論談の比重が高くなっているという(児玉解説、「別冊」pp.12-16)。記事の対象地域はメキシコ・中南米に限らず広範囲であり、「領事報告」からの転載も含め、ハワイ・北米地域に関する重要な資料が収録されている⁹⁾。また、本号注7)の角山幸洋の一連の論稿も、各種史資料・『朝野新聞』『大阪朝日新聞』ほか明治20年代の主要新聞に掲載された移民関係記事一覧・外務省史料・『殖民協会報告』『殖民時報』の発行状況及び掲載記事の詳細な題目などを収録し、移民研究一般にとっても有用な資料となっている。

571. 『高知殖民協会報告』高知殖民協会、1-4号：明26.10-27.10 <雑22-10>
「高知殖民協会」(『高知県歴史辞典』項目は「高知殖民会」と表記)は、「東邦協会」¹⁰⁾・上掲「殖民協会」等の設立に触発された高知県内の有志によって1893年6月(明26)に設立された。『高知殖民協会報告』(以下『報告』と略記)第1号には、「殖民事業ト国家経済ノ関係」と題する『報告』発行を祝す論説や協会発足の経過(「高知殖民協会の経過」)が掲載されている。「高知殖民協会規則」によれば、協会は、海外及び北海道その他の島嶼等に殖民することの利害を講究し、殖民事業を奨励することを目的とし、殖民に関する調査及び新聞・演舌会等による知識の普及をその事業とした(『報告』第1号)。『報告』第1-4号には、上掲『殖民協会報告』から抜粋、転載された北米・メキシコ等の巡回報告や探検報告¹¹⁾のほか、メキシコ事情に関する記事が多く掲載され(第3号「墨国須知」ほか)、また、記事及び雑報に殖民協会(「東京殖民協会」とも表記)の動向が記されている。このことから殖民協会(明26.3設立)と何らかの連携関係があったものと思われる¹²⁾。しかし、北海道への移住は数次にわたり行われているが、海外への移殖事業が実際に行われたか否かは、残存している『報告』からは判然としない¹³⁾。このような県ないし地域をその構成単位とした殖民協会(団体)が存在したということは、この時期日本の社会状況を反映するものとして重要ではある。しかし、これらに関する研究は、知り得る限り、ほとんど皆無である¹⁴⁾。

572. 『労働世界』労働新聞社、1-100号：明30.12.1-34.12.21、以後575.『内外新報』と改題(別タイトル：The Labor World)¹⁵⁾ <未所蔵>

近代日本の労働運動の淵源は、1891年(明24)サンフランシスコ在住の

高野房太郎らが結成した「職工義友会 *The Friends of Labor*」に遡る。在米中に「アメリカ労働総同盟 *AFL: American Federation of Labor*」会長ゴンパース *Samuel Gompers* の知己を得た高野は、1896年帰国し、日本での労働組合結成の時期を待った。第二次恐慌が起り各地で労働争議・同盟罷工が相次ぐなか、1897年、在桑時の同志と「職工義友会」を再結成。6月25日、神田の基督教青年会館に於いて「わが国最初の労働問題演説会」を開催し、わが国労働運動最初の印刷ビラ「職工諸君に寄す」を配布した。7月5日「労働組合期成会」設立。12月1日、日本最初の近代的労働組合「労働組合期成会鉄工組合」が結成された（高野房太郎「労働組合期成会成立及び発達の歴史」『労働世界』第15-17号：明31.7.1-8.1、『明治日本労働通信—労働組合の誕生』岩波書店、1997（岩波文庫）pp.388-396に再録）。同時に、わが国初の労働運動機関紙『労働世界』が、片山潜を編集主筆として創刊された¹⁶⁾。「労働は神聖なり」「団結は勢力なり」のスローガンを掲げ、安部磯雄・横山源之助・幸徳秋水・島田三郎らが寄稿、最終面には英文欄を設け海外との連携も推進した¹⁷⁾。その後、労働者の社会主義への関心に応えるべく、日刊の労働新聞発行が企図され、『労働世界』は第100号（明34.12.21）をもって廃刊、日刊『内外新報』（明35.1中旬頃刊行）へと引き継がれることになった。

573. 労働運動史料委員会編『労働世界』1-100号：明30.12.1-34.12.21（欠：35, 37, 49, 78, 79, 86, 87, 90, 96, 97, 99号）、労働運動史料刊行委員会、1960（572の複製、原紙の出版者は労働新聞社、別タイトル：The Labor World、隅谷三喜男「解題」：pp. v-xvi、本文補遺：pp.809-813、欄外記事補遺：pp.814-822、「目次」：pp.823-840） <Z99-503>

明治以降昭和20年までの労働運動に関する基本史料を集成する、『日本労働運動史料』全11巻（1959～、未完）編纂の過程で、労働運動史料委員会が蒐集した、米国議会図書館（*Library of Congress*）所蔵原紙（ウイスコンシン大学旧蔵）を基本に、慶應義塾大学・労働科学研究所及び中央公論社所蔵分で補充し、復刻したもの。復刻された『労働世界』は、新聞型で発行された創刊号から最終第百号までで、雑誌『労働世界』や『社会主義』等の後継誌は含まれないが、隅谷三喜男「解題」は、『労働世界』の発刊から後継誌『亜米利加』及び『渡米』にいたるまでの各紙（誌）創廃刊の経緯と論調の推移をたどる。

574. 隅谷三喜男監修『労働世界』1号：明30.12.1, 17号：明31.8.1, 24号：明31.11.15, 30号：明32.2.15, 50号：明32.12.1, 86号：明34.8.1, 90号：明34.9.11, 97号：明34.11.21, 99号：明34.12.11, 100号：明34.12.21、日本機関紙出版センター、1997（572の複製版抄、原紙の出版者は労働新聞社、別タイトル：The Labor World、日本初の労働運動機関紙実物大「復刻版」抄<労働世界>と片山潜1897～1901、序文：隅谷三喜男、解説：小森孝児「<労働世界>と片山潜1897～1901」） <Z99-1027>

573.複製版刊行後に発見された欠号分（86, 90, 97, 99号）4紙を加え、『勞

『労働世界』発行（1897年、明30.12.1）百年を記念して刊行された実物大10紙の復刻。小森孝児「戦前戦中の編集者たち<労働世界>創刊100年と片山潜」が諸資料も含み、『労働世界』創刊の経緯と片山潜について解説する。

【目次・総索引】

○大原社会問題研究所編『日本社会主義文献 第1輯 一世界大戦（大正三年）に到る』同人社書店、1929、pp.117 - 131 <363.031 - O354n ほか>（但し、『労働世界』1 - 51号）

575. 『内外新報』労働新聞社（572.『労働世界』の改題）、〔明35.1 - 2〕、以後576.『労働世界』と改題（別タイトル：日刊内外新報） <未所蔵>

『内外新報』は、労働者と社会主義のために、『労働世界』を廃刊してまで発行された日刊紙であったが、片山の健康問題をはじめ諸々の事情により極めて短命に終わった。その発行期間は1ヶ月とも2ヶ月とも言われているが、『内外新報』の原誌そのものが現存せず、幻の新聞と言われている¹⁸⁾。

576. 『労働世界』労働新聞社（575.『内外新報』の改題、572.『労働世界』の巻次を継承）、6年1号 - 7年6号：明35.4 - 36.2、以後578.『社会主義』と改題（別タイトル：再刊労働世界） <未所蔵>

『内外新報』頓挫の後、1902年4月（明35）、片山潜は捲土重来を期して『労働世界』を復刊した。「日本における労働者の唯一の機関紙」としての旧『労働世界』と異なって、再刊『労働世界』は「労働階級と社会主義の唯一の機関誌」としての立場をより鮮明にし、幸徳秋水・安部磯雄・木下尚江ら「社会主義協会」メンバーが多くの論説を寄せた。また、再刊初号から後継誌『社会主義』まで通して「渡米だより」「渡米協会記事」「渡米案内」欄を設け、同年春、片山が設立した「渡米協会」の機関誌としての性格も併せ持たせた。その『労働世界』6年1号には、「渡米せよ、渡米せよ、本会は此声実行せんが為めに起る其の会則左の如し」で始まる「渡米協会起る」という広告が掲載されている¹⁹⁾。その後、労働運動が停滞するにつれ、労使協調主義から社会主義へと、その論調を移行させていった『労働世界』は「一層激烈に社会主義を説くのを必要を」感じ（『労働世界改題予告』7年6号掲載）、1903年3月『社会主義』（7年7号〜）と改題された。

577. 労働運動史研究会編『労働世界 I - III』6年1号 - 7年6号：明35.4 - 36.2、明治文献資料刊行会、1963。（576.『労働世界』の複製、別タイトル：再刊労働世界、『明治社会主義史料集 補遺第2 - 4』として刊行、隅谷三喜男「解説」：『労働世界 I』 pp.Ⅲ - XI、「事項索引」：I（6年1 - 10号）巻末 pp.1 - 6 / II（6年11 - 20号）巻末 pp.1 - 5 / III（6年21号 - 7年6号）巻末 pp.1 - 5）

<363.021 - M448 - R>

明治期社会主義の研究に資するために、重要な機関紙を選び原型で復刻したものの、『労働世界』について隅谷三喜男が解説・整理する。『労働世界』の索引類がないなか「事項索引」は有用である。

578. 『社会主義』労働新聞社 (576.『労働世界』の改題, 巻次を継承), 7年7号-8年14号: 明36.3-37.12, 以後580.『渡米雑誌』と改題 (別タイトル: The Socialist) <未所蔵>

『社会主義』は『労働世界』の後をうけ, 「社会主義協会」の機関誌として, 明白な社会主義を論調として発行され続けたが, 社会主義運動が幸徳秋水の『平民新聞』(1903年, 明36.11創刊)へと移行し, 片山が再び渡米(1903.12)したことなどにより, 社会主義協会(会長は安部磯雄であったが, 実質的には幹事としての片山が運営)との関係は希薄化していった。片山の渡米に伴い, 『社会主義』は8年1号(1904.1)から山根吾一を編集主幹として発行された。社会主義協会との疎遠化と機関誌『社会主義』誌面の変容は, 既にその7年24号(1903.11)から表紙に「渡米者の良友」という文字が印刷されたことから窺える。山根が編集主幹となってからは, 「渡米協会機関」という文字がこれに取って代わり(5号~), 社会主義運動の主流から更に離れ, 専ら「渡米協会」の機関誌として機能していった。そして1904年12月, 従来とは異なり, 改題の予告をすることもなく, 8年14号(1904.12)をもって最終号とし, 『渡米雑誌』(1905年1月~)と改題された²⁰⁾。

579. 労働運動史研究会編『社会主義 I-III』7年7号-8年14号: 明36.3-37.12, 明治文献資料刊行会, 1963, (578.『社会主義』の複製, 別タイトル: The Socialist, 『明治社会主義史料集 補遺第5-7』)として刊行, 岸本英太郎「解説」: 『社会主義 I』pp.Ⅲ-ⅩⅢ, 「事項索引」: I (7年7-16号) 巻末pp.1-7/Ⅱ (7年17-26号) 巻末pp.1-5/Ⅲ (8年1号-14号) 巻末pp.1-5) <363.021-M448-R>

上掲577.『労働世界』同様, 明治期社会主義の研究に資するために, 重要な機関紙を選び原型で復刻したもの。『社会主義』については岸本英太郎が解説・整理する。『社会主義』の索引類がないなか「事項索引」は有用である。

580. 『渡米雑誌』渡米雑誌社 (578.『社会主義』の改題, 巻次を継承), 9年1号-10年12号: 明38.1-39.12, 以後581.『亜米利加』と改題 (別タイトル: The Socialist) <未所蔵>

『渡米雑誌』は, 山根吾一の編集・発行のもと「日本初の渡米・移民専門誌」として, 渡米・移民関係記事の掲載を増やし, 内務省警保局のブラックリストからも除外されるほどに, 『社会主義』色を払拭していった。「渡米ブーム」の時流にも乗り『社会主義』時代とは比較にならないほど「渡米協会」及び『渡米雑誌』は興隆を極めたが, 1906年1月(明39)に帰国した片山との経営権をめぐる諍いにより, 片山と山根は袂を分かった(『渡米雑誌』10年4号: 1906.4は「片山潜氏, 自今本社に関係無し」と告知)。また, なお「渡米協会」を名乗り続けている片山との混乱を避けるためか, 発行所を「渡米雑誌社」と変更した(片山は, ヒューストン及びサンフランシスコにも「渡米協会支部」を設置している)。片山はこの間, 雑誌『成功』(本号586)を中心に「渡米論」「テキサス米作論」を

展開し、『渡米の秘訣』（渡米協会、1906<YDM26923>）を刊行、1906年7月、テキサスでの米作経営のために再び渡米して行った。1907年1月、渡米協会は「日米協会」（在米者の事業協賛を目的に、渡米協会会員のうち在米会員で構成）と「渡米研究会」（渡米奨励を目的に、渡米協会会員のうち在米会員を除いた会員で構成）に組織改変がなされ、同時に『渡米雑誌』も『亜米利加』（1907.1～）と改題された²¹⁾。同年2月、テキサスでの米作経営に失敗した片山が帰国している。

581. 『**亜米利加**』 亜米利加社（580.『渡米雑誌』の改題、巻次を継承）、11年1号－13年5号：明40.1－42.5、国立国会図書館所蔵は11年5号－13年5号：明40.5－42.5（別タイトル：11年4号～The America） <YA-49>
- 『渡米雑誌』から改題された『**亜米利加**』は、「広き意味に於ける米利堅主義を鼓吹せん」との目的から、社名も「渡米雑誌社」から「**亜米利加社**」と変更している。折りしも世の中は第二次「立身出世ブーム」のさなか、1902年（明35）には、それを象徴する雑誌『成功』（下掲586）が創刊され、まさに成功を収めていた。『**亜米利加**』もまた「渡米＝成功」論を展開することになったのは当然の成り行きであった。ルーズベルト・ロックフェラー・カーネギー等々の「奮闘成功譚」、〇〇王と冠される在米日本人の「成功物語」及び米国・布哇事情が満載され、「渡米希望者向けの総合アメリカ情報誌としての内実を整えていった」のである（岡林伸夫『ある明治社会主義者の肖像』2000、p.270）。『労働世界』の流れを汲む『**亜米利加**』のあまりの変質ぶりに対しては、米国での日本人排斥運動とも相俟って、社会主義者からの批判もまた相次ぐことになった。就中、幸徳秋水の渡米論批判「渡米せしむべき人」が『**亜米利加**』11年11号（1907.11、明40）に掲載されたことは皮肉である²²⁾。米国での日本人排斥・移民制限運動は、日本政府が労働者に対して旅券を発行しないことを旨とする「日米紳士協約」の発効（1908年3月）により一つのクライマックスを迎えた。これと時を同じくして、『**亜米利加**』は12年4号（1908年4月）より『日米通信』の臨時増刊として刊行されることになった。臨時増刊としての『**亜米利加**』の発行所は、渡米雑誌社→日米通信社（12年3号）→日米通信発行所（12年4号～）、事務所も**亜米利加社**→日米通信社（12年5号～）と変更されている。『日米通信』は日刊新聞らしいが原紙の所在は確認されていないという（岡林上掲書、pp.298－300）。渡米の途を閉ざした「日米紳士協約」はまた、『**亜米利加**』からもその読者を去らせることになった。経営悪化を来たした『**亜米利加**』は、「日米未来戦記」ものや「南米」ものを掲載することで急場を凌ごうとしたが、13年5号（1909年、明42.5）をもって廃刊された。岡林上掲書は「そして、山根吾一の行方も、わからない…」と結んでいる²³⁾。
582. 『**渡米**』 渡米協会支部、1－2巻1号（1－3号）：明40.11－41.1 <未所蔵>
- 山根吾一と決別し『渡米雑誌』を離れた片山は、『**亜米利加**』に遅れること約1年、1907年11月（明40）、「渡米奨励を主として兼ねて国民的海外発展を計る」

ことを目的とし『渡米』を創刊した。片山の渡米援助の情熱は変わらなかつたものの、その経営基盤は、山根『亜米利加』・島貫『渡米新報』（下掲583）に較べるべくも無く弱体であり、片山の個人雑誌としての感が否めなかつた。「日米紳士協約」の影響も大きく、『渡米』そのものは三号雑誌に終わった。1908年4月から、日米経済問題を加味した『日米経済新報』と改題し存続を図つたが間もなく休刊、「渡米不振の際吾人は独立の雑誌発刊に困難を感じると同時に従来の如き必要を認めず」として、1908年10月からは『社会新聞』（1907.6, 明40創刊、主筆片山潜・西川光二郎）の「渡米案内」へと路線を縮小し、そこで片山渡米論は72号（1910.10.15）まで掲載された^{24）}。

【目次・総索引】

○『明治新聞雑誌文庫目次総覧 115（外交編）』：『渡米』1-2巻1号

583. 『渡米新報』日本力行会、1巻1号-7巻3号：明40.5-42.3（6巻1号：明41.1から『力行』を吸収合併、7巻3号で廃刊、以後『救世』に吸収合併）

<雑22-41><YA-57>

584. 『力行』日本力行会、1-〔〕：明36.6-〔〕（明41.1から『渡米新報』に吸収合併）

<未所蔵>

585. 『力行世界』力行世界社、299-408号：昭4.11-12.12, 574号：昭28.1-（欠：339, 343, 635, 642, 644, 646-648, 657, 670-681, 686号）

<Z3-433>

『渡米新報』は、「日本力行会」渡米部の機関誌として、1907年5月（明40）に創刊された。日本力行会は、島貫兵太夫（1867：慶応3-1913：大2）^{25）}が1897年元旦、「救世軍新年伝道隊」に遭遇した時の天啓により始めた、苦学生救済事業「東京労働会」をその前身とする。島貫はその後、渡米視察により「米国で苦学成功することの容易さ」を実感し、キリスト教信仰に基づく「霊肉救済」の一環として、苦学生の渡米奨励・困窮者の海外移住に傾注していった。この間の経緯を、日本力行会100周年を記念して出版された『日本力行会百年の航跡』の目次を抜粋することで、以下に跡づける^{26）}。（括弧内は筆者補）

○明治30年元旦創業・苦学の援助と渡米奨励（キリスト教牧師として苦学生救済活動に従事、機関誌1895.3（明28）-『救世』『慈善新報』, 1895.5島貫『軍人と基督教』, 1897.1（明30）「東京労働会」創設, 1897.11-1898.5渡米視察のち1898「苦学部」「渡米部」に分かつ）○日本力行会と改称・東京小石川原町に移る（→「東京精勤会」→「東京造士会」→1900.9「日本力行会」, 「力行」は中国語「苦学力行」から仮借）○盛んとなる「渡米部」・日本の海外進出気運の中で（「渡米熱」：1901（明34）島貫『成功の秘訣』『最新正確・渡米案内大全』1904『最近渡米策』1905『実地渡米』1911『新渡米法』刊行／／1902.4「渡米協会」《1902.10雑誌『成功』創刊》1902-03『労働世界』（「渡米だより」）1903-04『社会主義』1905-06『渡米雑誌』1907-09『亜米利加』／片山潜1901『渡米案内』1902『続渡米案内』1906『渡米之秘訣』／山根吾一1906『最

近渡米案内) ○機関誌『力行』・明治36年6月発刊²⁷⁾(1903.6 苦学生を「教養せんが為に」創刊) ○渡米部活況・苦学部にも多数の会員 ○『渡米新報』の創刊(1907.5, 明40 創刊, 発刊の主意: 「十余年来此海外行者殊に渡米したる数百の青年を教育して好結果を得たる実験的知識を広く此らの発展者の為に用ふるは必ずや此らの人々の益となるべく国家の利となるべきを信じ一般の人々の為には殊に我会員を教育する機関の一なる『力行』と区別して此渡米新報を発刊して其用に供して些か我同胞発展の便益に供せん」)

『渡米新報』創刊号は、線路の彼方に太陽が輝く図の周りに、「渡米」「憤闘」「成功」「進歩」の四文字を円環状に配して、その表紙とし、島貫の力行思想をよく顕現したものであった。創刊号の内容は以下のとおりである。

〔論説: 渡米者への注意-ハリス博士/米国へ来たらんとする人へ忠告-ストージ博士/日米の関係-大隈伯/渡米者の成功-島田三郎/渡米と新殖民-竹内正志/敢て諸君に渡米を勧む-田川大吉郎/テキサス米作談-西原清東/渡米奨励すべからざるか-エール学人/膨張的国民の品性-新渡戸稲造〕〔立志憤闘: 我邦最初の渡米熱心家/成功片史(青年の熟考を求む)/渡米成功の人(根本正君)/渡米成功者(畑井新喜司君)・・・<略>〕〔渡米実地通信(在米会員の通信): <略>〕〔書翰訓(実地効果ある文書): <略>〕〔渡米問答: (一) 渡米するには何か一番必要でありますか・・・<略>〕〔渡米雑録: 新殖民地の建設/最新流行服談(小林亮氏談)/皇国殖民会社訪問談〕〔渡米諸規則: 外国旅券規則(三月十五日改正)/帰化権(次号より順を追って日本全国三府四十八県の書式を記載す)〕

知名度の高い論説陣と多彩な記事を配した『渡米新報』は、内容的に充実した渡米専門誌として、人口に膾炙し、渡米希望者は増加の一途をたどった。島貫の「渡米論」は、キリスト教信仰に基づく精神力を重視し、力行会本部において「修養研究」を行い²⁸⁾、渡米後も本部との連絡をとらせるという用意周到なものだった。いわば「アフターケアも考えた渡米論」だったのである(桑井『外国人をめぐる社会史』p.36)。当初、『力行』(明36.6 創刊、『日本力行会百年の航跡』本文に拠る)とその役割を区別して刊行された『渡米新報』(明40.5～)であったが、6巻1号(明41.1)で既に『力行』を吸収合併している。その『渡米新報』も7巻3号(明42.3)まで刊行の後、明治42年5月からは『救世』(明28.3～)に合併されることになった。これは、片山・山根の「渡米協会」と同じく、アメリカでの排日運動、「日米紳士協約」による影響が大だったものと思われる。島貫の逝去後、第二代会長永田稠の時代になると、その移住活動の力点は、閉ざされたアメリカから南米・満蒙へと、愈々傾斜していった。機関誌『救世』もまた、最終的には『力行世界』へと統合され、現在も刊行され続けている。

586. 『成功』成功雑誌社、1巻1号-30巻3号: 明35.10-大4.12, 国立国会図書館所蔵は4巻2号-30巻3号: 明37.4-大4.12(欠: 18巻3号, 別タイトル: 立志独立進歩之友)²⁹⁾ <雑52-13>

1902年10月10日(明35)、村上俊蔵(濁浪)は青少年の立志・努力・勤勉の精神を涵養するため、アメリカの雑誌『サクセス Success』(1897.12, マーデン Orison Swett Marden 創刊)に倣い、雑誌『成功』を創刊した。村上の経歴及び創刊の経緯について、詳しくは知られていない³⁰⁾。『成功』の創刊は、片山潜が「渡米協会」を設立し、『労働世界』を再刊してから半年の後、島貫兵太夫「日本力行会」渡米部も活況を呈していた時期である。明治30年代に隆盛をみた「渡米論」「渡米熱」は、社会的下支えとしての、苦学生を中心とした、いわゆる「立身出世」「成功」ブームに乗ったものであった³¹⁾。片山も島貫も、自らの在米経験を基に、「苦学」と「渡米」を結びつけることで、まさに「成功」したと言えよう。しかし、このようなブームのなかで、幸徳秋水ら社会主義者から批判があったことは上記した(p.70)。実際、苦学生を利用した営利事業も少なからず存在したようであり、「渡米熱」を利用した詐欺に注意するよう、警告する「苦学」本も出版されている³²⁾。このような状況のなかで、「立身出世・成功」ブームに先鞭をつける形で、『成功』が創刊されたのである³³⁾。『実業之日本』は翌1903年に「成功の栞」欄を設置、『太陽』『中央公論』『実業之世界』などの総合雑誌も追隨して「成功」関連記事を掲載し始めることになった。またブームに肖り、『成功之少年』(明38.8)・『女子成功』(明39.7)・『店員成功雑誌』(大8.1)など「成功」を冠した雑誌も次々と創刊された。

「今日の社会に要する人物は、…只自ら助け自ら重んじ、自ら営為し、自ら勤勞し、自己の手腕を以て自らの運命を作り出す人物にあり、…国家は斯る人物の存在に因って興り、斯る人物の欠乏によって衰ふ…」とのスマイルズ『セルフ・ヘルプ』を髣髴とさせる「発刊之辞」を掲げ、自宅の一室で創刊された『成功』は、1905年(明38)には15,000部の発行部数を誇るまでになり、その後、夏目漱石の小説『門』(明43)に実名で登場するほど、時代を顕現するポピュラーな雑誌となった。村上は、外国偉人伝をはじめ小説・殖民案内の出版にも手を広げ、『探検世界』『殖民世界』など新たな雑誌も創刊した³⁴⁾。結局、『成功』で得た資財を、白瀬轟中尉による日本初の「南極探検」(1910-12年、後援会長は大隈重信、隊員のなかには「日本力行会」員が2名いた。南極探検後援会編『南極記』大隈重信、成功雑誌社発売、大2<348-117ほか>参照)につぎ込み、それが『成功』廃刊の遠因になったとも言われている。『成功』は、創刊当初から、労働者階級及び労働運動にも関与し、創刊号には『労働世界』の広告が掲載され、両誌に重複する寄稿者も多かった。『渡米雑誌』を離れた片山が、テキサスを中心とした渡米記事を、一時期『成功』に集中的に寄稿している³⁵⁾。著名な「特別賛成員」「名誉賛成員」と幅広い執筆陣を擁し³⁶⁾、兄弟誌『探検世界』『殖民世界』により未知の世界へと青少年を誘った『成功』もまた、「日米紳士協約」の発効により、セールスポイントの一つ「渡米=成功」を失うことになった。「帝国主義」への傾斜を強めていた『成功』は、1915年9月号(大4)において旗幟「強者主義」を鮮明に宣言するが(29巻6号「本社の新旗幟『強者主義』

宣言」、間もなく廃刊。『サクセス Success』（1911年廃刊、1918年再刊）のように再び刊行されることはなかった³⁷⁾。

587. 『殖民世界』成功雑誌社、1巻1-5号：明41.5-9 <雑22-42>

『殖民世界』は、『成功』を「殖民志望者」に特化する形で、1908年5月7日(明41)に創刊された³⁸⁾。創刊号巻頭において、(本誌は)「本邦に於ける殖民志望者の唯一伴侶と為り、海外に於ける総ての有利事業有望職業を同胞に向ひて紹介せんことを期す」「大陸的世界的の実業家を、我國民中に養成せんが為め能ふべき文有益なる商業工業農業等の材料を掲載せんことを期す」「現に海外に活動しつゝある我が同胞の益友を以て任じ、其智識上に於て得る所多からしむると共に、之が最大の慰藉者たらんことを期す」「能ふべき文海外に於ける新通信を掲げ、以て読者をして新時代の趨向を熟知せしめ、一世の指導者、率先者たらしめんことを期す」(「本誌綱領」)と、その編集方針を謳っている。大隈重信は、創刊号論壇「大和民族膨張と殖民事業」において、「それほど排斥する北米に、何も喧嘩腰になって押寄せ行く必要もあるまい。…容易にして実効ある地方に行くが得策である。就中余は南米の如き曠濶豊饒なる地に行くの勝れる」とし、次いで「朝鮮」を挙げている。兎玉花外の新体詩「行く鴻池」と並ぶ殖民文学のもう一篇は、堀内新泉の殖民小説「南米行」である。また、鎌田三之助『墨西哥殖民案内』(成功雑誌社刊)広告は「北米活動者必読書」とのコピーを掲げ「北米に於て目今本邦人の赴きて容易に殖民事業に従事し得べき処は墨西哥(メキシコ)」であると宣伝している。創刊号に掲載されたその他の記事も、メキシコ・バルー等中南米及び中国・韓国関係がその殆どを占めている。短期間ではあるが、5号までこの傾向に大きな変化はなく、「有望」情報化された「南米」イメージが作り上げられて行った³⁹⁾。『殖民世界』1巻4号(明41.8)には、次号9月号より増頁・記事大精選を行い、趣味と実益を兼ねた大雑誌への転換を図る旨の「社告」が掲載された。同時に、この大計画を実行するための定価値上げ(12銭→15銭)についても、控えめに書き添えられている。その9月号は、「社告」どおり増頁されたこと(72頁→92頁)、目次頁の体裁が変わったこと、及び奇抜で趣味に富む「殖民世界大懸賞『美人国』」⁴⁰⁾が発表されたことを除けば、紙面刷新の跡は些かも見受けられない。ただ表紙装丁だけは、これまでの『殖民世界』の旗を立てる中世騎士風から「世界地図に囲まれたハイカラ紳士」へとまさに刷新されている。その9月号をもって、海外奮闘家唯一の伴侶・世界的実業家必読の雑誌『殖民世界』は廃刊となった⁴¹⁾。

【目次・総索引】

○「和田教彦ホームページ(<http://fan.shinshu-u.ac.jp/~wada/index.html>)」：『殖民世界』1巻1-5号

588. 『日本移民協会報告』日本移民協会、第1-16：大3.10-8.6、国立国会図書館所蔵は第2-16：大4.8-8.6 <雑22-52>

「日本移民協会」は、アメリカの排日運動に対する緩和策としての「対米啓発

運動」の一環として、政府の要請でその設立が企図された⁴²⁾。1914年2月11日(大3)創立総会が開催され「日本移民協会設立趣旨(一次)」及び「同規約」を採択した。「在外国民の権利利益を擁護し一般国民の対外思想を喚起して益々移民を多からしめ以て世界に於ける最大利益を獲得するの法を講じ之と同時に国内の産業を発達せしめ以て通商貿易を隆盛ならしむる」ことが設立の目的である⁴³⁾。9月15日の第一回総会で大隈重信が会頭に推薦され、翌1915年5月大隈邸で開催された評議員会で副会頭に添田壽一を推薦、引き続き行われた第二回総会で、「設立趣旨(一次)」が改正され、「日本移民協会処務及会計規定」が制定された。「設立趣旨(第二)」は「移民問題ハ政治上経済上並社会上最大重要問題ノ一タリ…海外移住ノ志望ヲ抱ク者…ニ対シ適当ノ資料ヲ供シ之ヲ指導誘掖スル…海外ニ在ル移民ヲシテ規律徳義ヲ重ンシ母国ノ体面ヲ辱シメサルト同時ニ在留国人ノ指摘ヲ招カサラシムヘキ方法ヲ講スル…叙上ノ目的ヲ達シ我同胞ノ海外発展ニ資セン…」となっている。この設立趣旨に基づき、協会の事業として①移民発展の方法に関する立案②移民地の調査及び結果の紹介③移民の訓育指導④移民排斥に対する対処⑤移民事業に必要な人物の養成⑥雑誌・出版物の刊行及び講演会の開催⁴⁴⁾⑦移民に関する参考品・資料の蒐集⑧類縁機関との連絡⑨前記事業遂行のための調査員の派遣、などを定めている(「日本移民協会規約」第三条)。錚々たる役員については、名簿が『日本移民協会報告』第2号に掲載されており、注42)問宮論文が経歴を付して纏めている(p.162)⁴⁵⁾。問宮論文はまた、掲載の「論説」及び「移民地・移民関係の情報記事」「講演会開催状況」「移民講習会」「講習会受講者府県別分布」についても纏めている。

『日本移民協会報告』の内容は、論説・移民地情報・移民関連事項・協会記事などに大別され、その論調については、問宮論文が整理している。「東西文明調和論者」大隈会頭の論説(「世界の大局と日本」2号、「移住の神髄」14号、「世界的大変革」16号)が、この時期の日米移民問題を象徴している。「官民賛同のもと約700名の会員を持ち、活発な事業活動を行った」日本移民協会の存続期間及びその機関誌『日本移民協会報告』の最終号は、これまでに掲出した移民奨励団体と同様、確認されていない⁴⁶⁾。

【目次・総索引】

○『明治新聞雑誌文庫目次総覧 60(経済編Ⅱ)』：但し、『日本移民協会報告』第1-13

Ⅷ. 注

- 1) 今後なお収録すべき形態別資料群として、①学位論文②(文部科学省)科学研究費補助金研究成果報告書等助成研究報告書③シンポジウム報告書④記念紙・誌⑤年鑑・年報等⑥写真集・絵画集・図録⑦オーラル・ヒストリー⑧AV資料⑨帝国議会会議録⑩公聴会記録等米国会議資料⑪米国法令・判例資料⑫米国国立公文書館所蔵資料を予定。また、形態別資料のほか、⑬移民関係資料所蔵機関の概要(国内・国外)⑭メモリアル・サイト(遺跡・史跡等)⑮「主題別」主要文献などを収録する予定である。
- 2) これまで収録した資料群(構成につき本号目次を参照)につき、新たに収録すべき、あるいは追加を要すべき主なものは以下のとおりである(既収資料関係分のみ、雑誌論文及びエッセイ類を除く)。

【外交史料】 *外務省通商局編『通商公報』(12.『通商彙纂』の改題)全145巻・「解説・総索引」全4巻、1-1228号:大正2年4月-13年12月、不二出版、1997~(刊行中)、(14.『通商公報』の複製、別冊:『通商公報』解説・総索引, 解説/高嶋雅明) <Z79-B51> *外務省通商局編『移民地事情』全10巻・別冊1、1-27巻:大正11年5月-昭和6年9月、不二出版、1999-2000(複製、別冊:『移民地事情』解説・総目次, 解説/柳田利夫) <DC812-G120> (主に、南米地域の移民受入地の視察報告) *広瀬順皓監修・編・解題『近代外交回顧録』全5巻、ゆまに書房、2000(複製、近代未刊史料叢書5) <A99-Z-G113> (外交記録編纂の一助として、外務省調査部が昭和13-14年にかけて行った、外交官の談話速記及び関連史料。主に外務省外交史料館所蔵「外交資料蒐集関係史話集」を底本に、外務省調査部「外交史料編纂事業ニ就テ」、伊丹松雄「創始時代ニ於ケル『ブラジル』移民」、野田良治「『リオ』州低地ノ開拓ト日本人」、出淵勝次「二十一箇条問題、米国排日移民法修正問題」などを収録)

【統計】 *一橋大学経済研究所附属日本経済統計情報センター編『郡是・町是資料マイクロ版集成』[マイクロ資料]全105リール、丸善、1999 <YD1-403> *外務省通商局編『海外各地在留本邦人職業別人口表』全5巻・附録1、明治40-昭和15年、不二出版、2002(複製、第1巻に解説/柳田利夫) <未所蔵> (61.『海外各地在留本邦人職業別人口表』ほかを年次別に整理して復刻したもの)

【名簿・名鑑】 *『日米年鑑』全12巻、1905-18、日本図書センター、2001-02(複製、原本の発行者は日米新聞社) <D2-G284> (国立国会図書館所蔵77.『日米年鑑』は1914-18:明治42-45、明治38-41年は『在米日本人年鑑』第1-4号、国立国会図書館未所蔵。『日系移民資料集』の第3期として刊行。第1期は278.『北米編』、第2期は下掲『南米編』)。

【年表】 *村上義和・橋本誠一編『近代外国人関係法今年表』明石書店、1997 <A112-G103> (107.「近代外国人関係法今年表」『法経研究』(静岡大

学)『静岡大学法政研究』掲載の単行書化)

- 【文献・史資料目録】*『和歌山市民図書館移民資料索引』〔電子資料〕和歌山市民図書館, 1999 <YH213-23>, 『和歌山市民図書館移民資料索引—平成11年1月20日現在』(改訂版), 1999.6 <YH213-24> (158.『和歌山市民図書館所蔵移民資料目録 和文編1』以降平成11年1月20日現在までの収蔵資料索引を3.5インチ,フレキシブル・ディスク1枚に収める)*『海外発展関係書籍および資料目録集—(財)日本力行会発刊・所蔵-1』日本力行会創立百周年記念事業実行委員会, 1997 <D1-G85> (日本力行会が所蔵する書籍, 海外移住・国際交流関係資料約13,000点のうち整理済み1,517点の目録。日本力行会のホームページで未収録分についても順次公開する。「力行会発刊・所蔵資料目録」<http://www.rikkokai.or.jp/mokuroku-a.html>) * Ichioka, Yuji, Azuma, Eiichiro, comp. **A Buried Past II : A Sequel to the Annotated Bibliography of the Japanese American Research Project Collection.** Asian American Studies Center, Univ. of California, Los Angeles, 1999 <移()-Y14> (183. A Buried Past.の続刊) * Ito, Leslie A. revised and expanded. **Japanese American during World War II : A Selected, Annotated Bibliography of Materials Available at UCLA.** 2nd ed. UCLA Asian American Studies Center Reading Room, 1997 <移(六)-Y2> (185. Japanese American during World War II.の改訂版)
- 【辞典・事典】*アケミ・キクムラ・ヤノ編, 小原雅代[ほか]訳『アメリカ大陸日系人百科事典—写真と絵で見る日系人の歴史』明石書店, 2002 <DC812-H2> (1998年4月から始まった「国際日系プロジェクト *International NIKKEI Research Project*」の研究成果の一つ。「国際日系プロジェクト」につき, 本書 pp.7-9, 及び「全米日系人博物館 *Japanese American National Museum*」のホームページ <http://www.janm.org/inrp/japanese/>を参照のこと) * Niiya, Brian, ed. **Encyclopedia of Japanese American History : An A-to-Z Reference from 1868 to the Present.** updated ed. Facts on File, 2000 <未所蔵> (153. Encyclopedia of Japanese American History.の増補改訂版)
- 【通史・概説書】*戸上宗賢編著『交錯する国家・民族・宗教—移民の社会適応』不二出版, 2001 (龍谷大学社会科学研究所叢書 45) <DC811-G6>*岡部牧夫『海を渡った日本人』山川出版社, 2002 (日本史リブレット 56) <DC812-G182>*矢口祐人『ハワイの歴史と文化—悲劇と誇りのモザイクの中で』中央公論新社, 2002 (中公新書) <GJ123-G44>*飯野正子『もう一つの日米関係史—紛争と協調のなかの日系アメリカ人』有斐閣, 2000, <DC812-G129>*坂口満宏『日本人アメリカ移民史』不二出版, 2001 <DC812-G176>*ハルミ・ベフ編『日系アメリカ人の歩みと現在』人文書院, 2002 <DC812-G205>*荻原俊洋『排日移民法と日米関係—「埴原書簡」の真相とその「重大なる結果」』岩波書店, 2002 <AU-631-G15>* Hirabayashi, Lane

Ryo, et al., ed. *New Worlds, New Lives : Globalization and People of Japanese Descent in the Americans and from Latin America in Japan*. Stanford Univ. Pr., 2002 <未所蔵> (「国際日系プロジェクト *International NIKKEI Research Project*」の研究成果の一つ) * 奥泉栄三郎監修・解説・解説『北米剣道大鑑』上・下, 文生書院, 2001 (粉井一剣『北米剣道大鑑』北米武徳会, 昭14 <774-25>の複製) <FS37-G537> (主題別文献ではあるが, 奥泉の「解説」が移民研究史としても有用) * 若槻泰雄『外務省が消した日本人—南米移民の半世紀』毎日新聞社, 2001 <DC812-G168>

【資料集・叢書】* 佐々木敏二, 権並恒治編・解説『カナダ移民史資料 II』全6巻・別冊1, 不二出版, 2000 (複製, 443. 『カナダ移民史資料』の第II集, 巻次を継承, 解説・解説/佐々木敏二は第6巻 pp. 1-23に収録, 別冊: 『解説』『英文目次』『加奈陀と日本人』英訳) <DC812-E216> (別冊タイトルは Gonnami Tsuneharu et al. ed. *Historical Materials of Japanese Immigration to Canada : Supplement*, 解説(英文)/権並恒治, 「目次」は第I集分も含む。<DC812-A104>) (吉田龍一編『加奈陀在留邦人々名録』, 中山訊四郎『加奈陀同胞発展大鑑 全』『加奈陀と日本人』, 林太郎『黒潮の涯に』など10点を収録) * 石川友紀監修『日系移民資料集 南米編』全30巻・別巻1, 日本図書センター, 1998-99 (複製, 「別巻」に解説・解説/石川友紀) <DC812-G101> (新刊ではないが, 南米編のため収録しなかったもの。水野龍『南米渡航案内』, 横山源之助『南米渡航案内』, 永田稔『南米一巡』, 拓務省拓務局『移植民講習会講演集』など全30点を収録) * 『近代欧米渡航案内記集成』全12巻, ゆまに書房, 2000 (複製) <GG176-G100> (福沢諭吉『西洋旅案内』, 移民保護協会編『海外出稼案内』, 吉村次郎『青年之渡米 最新視察苦学者の天国』, 藤本西洲他『海外苦学案内』, 木村芳五郎他『最新正確 布哇渡航案内』, 島貫兵太夫『最近渡米策』, 山根吾一編『最近渡米案内』, 片山潜『渡米の秘訣』など16点を収録) * 奥泉栄三郎監修・解説『初期在北米日本人の記録』全34冊, 解説・総目次編1, 文生書院, 2003~ (複製) <未所蔵> (北米編全25冊: 明治23-昭和15年, 布哇編全9冊: 明治35年-昭和15年の各地「同胞発展史」「県人発展史」類を復刻, 2003年2月から刊行)

- 3) 「移植民論」(個人の「移植民論」及びそれに関する研究論文については後掲予定)「渡米熟・渡米案内・渡米奨励機関・渡米雑誌」につき前掲, 『参考書誌研究』No.52, pp.24-26, 61-62及び各注(pp.68-70, 86-87)を参照のこと。
- 4) 雑誌記事・論文の検索方法については, 例えば, 毛利和弘『文献探索法の基礎—レポート・論文作成・調査必携—2000—』図書・雑誌・新聞・電子情報編 アジア書房, 2000 <UL735-G1>, 実践女子大学図書館編『インターネットで文献探索—2000年版』実践女子大学図書館, 2000 <UL41-G19>

(2002年版も刊行されているが未見。最新情報については、同図書館のサイトを参照されたい。<http://www.jissen.ac.jp/library/frame/index.html>), 佐藤能丸編『文献リサーチ日本近現代史』芙蓉書房出版, 2000 <GB1-G50>など最新の情報を取り入れたガイドを参照されたい。また, 国立国会図書館「雑誌記事索引」(1948年以降採録, 「採録誌一覧」あり。<http://opac.ndl.go.jp/>)が採録していない明治・大正・昭和前期(昭和23年まで)の雑誌記事引として, 例えば, 石山洋〔ほか〕編『明治・大正・昭和前期雑誌記事索引集成』社会科学編全70巻, 人文科学編全50巻, 専門書誌編全63巻, 皓星社, 1994~<UP54-E16ほか>及び『東京大学法学部附属明治新聞雑誌文庫所蔵雑誌目次総覧』全150巻, 大空社, 1993-98(明治新聞雑誌文庫所蔵雑誌目次総覧複製)<UP54-E10>があるので利用されたい。「総目次・総索引」の所在については, 本文P.65を参照のこと。ここでは, 研究誌・紀要類などの最近の主な「移民関係<特集>号」を例示しておく。*『季刊国際政治』79: 1985.5(日本・カナダ関係の史的展開)<Z1-30>*『歴史学研究』581: 1988.6(人の移動から歴史を見る) / 582: 1988.7(人の移動から歴史を見る-2-) <Z8-282>*『歴史評論』513: 1993.1(近代日本の「移民」を問ひなおす) / 625: 2002.5(移民と近代社会) <Z8-284>*『歴史研究』414: 1995. 11(ブラジル移民の謎) <Z8-512>*『歴史公論』5(1): 1978.1(近代百年と移民) <Z8-1317>*『歴史地理教育』580: 1998.7(ハワイ併合100年) <Z7-248>*『地理』33(2): 1988.2(国境をこえる労働者-移民・難民問題に学ぶ) / 36(5): 1991.5(アジア系アメリカ人) <Z8-372>*『宗教研究』67(1): 1993.6(民族と宗教) <Z9-184>*『キリスト教社会問題研究』34: 1986.3(海外移民研究特集) / 37: 1989.3(廃娼・移民・平和-杉井六郎教授退職記念号-) / 38: 1990.3(海外移民研究特集) / 41: 1992.7(カナダ日系社会とキリスト教会-その歴史と現状) <Z9-77>*『駿台史学』99: 1996.12(西洋史特集-同化とアイデンティティ) <Z8-354>*『社会学評論』44(4): 1994.3(情報化社会の中のエスニシティ) <Z6-265>*『トレイシーズ』2: 2001.8(人種パニックと移民の記憶) <Z71-E843>*『思想の科学』430: 1987.9(海外日本人の想像力-北アメリカより) <Z6-1457>*『田中正造の世界』2(通号16): 1984.11(移民) <Z6-2165>*『新沖縄文学』45: 1980.6(沖縄移民) <Z13-1198>*『芸術新潮』46(10): 1995.10(アメリカン・ドリームに賭けた日本人画家たち) <Z11-97>*『世界』394: 1978.9(沖縄-ハワイ移民ノート) / 565: 1992.3(日系人特集-ニッポンを見つめる日系人) <Z23-12>*『海外移住』580: 1998.3(ファインダー越しにみた日系移民) <Z3-1565>* The Japanese Journal of American Studies. 3: 1989 (Japanese Immigrants and Japanese Americans) <Z52-D309>

また, 以下の雑誌(廃刊のものを含む)には, 移民研究・移住関係誌は当然

ながら、「移民関係」記事・論文が掲載される（されている）ことが多いので、平素から通覧しておくことも必要である。＊『外交史料館報』〈Z1-442〉＊『移住研究』〈Z3-584〉（33号：1996.4で廃刊，33号に既刊内容紹介あり。山田晴通は、「日系新聞研究会」員の研究成果をほぼ網羅する「北米日系新聞日本語文献一覧」同様，「『移住研究』掲載論文一覧」一刊行順目次・対象地域索引・執筆者名索引一をホームページで公開している。<http://camp.ff.tku.ac.jp/TOOL-BOX/mig/iju.html>）＊『季刊海外日系人』〈Z3-1360〉＊『移民研究年報』〈Z3-B399〉＊『アメリカ研究』〈Z8-43〉＊ **The Japanese Journal of American Studies** 〈Z52-D309〉（『アメリカ研究』及び **The Japanese Journal of American Studies** の目次は「アメリカ学会」ホームページにあり。<http://www.ai-gakkai.or.jp/jaas/periodicals>）＊『東京大学アメリカ研究資料センター年報』〈Z41-1712〉＊『東京大学アメリカン・スタディーズ』〈Z8-B527〉＊『アメリカ太平洋研究』〈Z71-F985〉（東京大学大学院総合文化研究所附属「アメリカ太平洋地域研究センター」—前身「東京大学アメリカ研究資料センター」，2000年4月機構再編に伴い改称—刊行物のうち，『東京大学アメリカン・スタディーズ』の目次及び『アメリカ太平洋研究』の全内容をホームページで閲覧することができる。<http://www.cpas.c.u-tokyo.ac.jp/>）＊『カナダ研究年報』〈Z8-1643〉（既刊目次が「日本カナダ学会」ホームページにあり。<http://www.jacs.jp/nen-pobk.html>）＊『沖縄県史料編集所紀要』『史料編集室紀要』〈Z8-1380〉＊『キリスト教社会問題研究』〈Z9-77〉＊『渋沢研究』〈Z9-930〉（「渋沢青淵記念財団竜門社付属渋沢史料館」ホームページに研究ノート・書評を除く掲載論文の一覧あり。<http://shibusawa-museum.or.jp/study2.htm>）＊『AALA Journal』〈Z12-B53〉＊『朱夏』〈Z13-4340〉（既刊内容が「せらび書房」ホームページにあり。<http://www1.odn.ne.jp/serabi>）＊『汎』〈Z23-548〉（15号：1990.1で休刊，15号に主要内容あり）＊ **Pacific Affairs** 〈Z52-B231〉＊ **Pacific Historical Review** 〈Z52-B277〉＊ **Amerasia Journal** 〈Z52-E79〉（‘**Amerasia Journal Cumulative Article Index 1971 - 1997**’ 〈Z52-E79〉。‘**30th Year Index Guide to Asian American Studies**’ 2003〈未所蔵〉。UCLA *Asian American Studies Center* のホームページでキーワード検索が可能。http://www.sscnet.ucla.edu/esp/aasc/aj_index.html）＊ **The Hawaiian Journal of History** 〈未所蔵，一部憲政資料室で所蔵〉（‘**Index to the Hawaiian Journal of History**’ Vol.1 - 25：1967 - 91，3分冊〈移（四）- Y14〉。Vol.26：1992年以降は「ハワイ歴史協会 *Hawaiian Historical Society*」のホームページに掲載。<http://www.hawaiianhistory.org/pubs>）

なお，＊『初期社会主義研究』〈Z6-2186〉（「初期社会主義研究会」）＊『熊楠研究』〈Z71-E747〉（「南方熊楠資料研究会」<http://www.aikis.or.jp/kumagusu/>）＊『メディア史研究』〈Z21-B110〉（「メディア史研究会」）

<http://www.ia.inf.shizuoka.ac.jp/~ikawa/media/> * 『Intelligence』 <Z71-G814> (『20世紀メディア研究所』 <http://www8.ocn.ne.jp/~m20th/>) などには、それぞれの研究視点からの移民(人物)関係論稿が掲載されている。各ホームページでは目次・内容紹介を公開する。

- 5) 「明治新聞雑誌文庫」については、『参考書誌研究』No.54, p114所収の文献を参照のこと。ここでは、『「明治を読む」—明治の新聞雑誌展』(付「新聞・雑誌創刊年表(文久元年~明治45年)」) 東京大学明治新聞雑誌文庫, [1977] (会期: 昭和52年10月20日-25日, 大丸東京店) <UM84-31>, 「明治新聞雑誌文庫—臭いメシから生まれた宮武外骨の労作」『芸術新潮』46(11): 1995.11, pp.18-22 (東京大学のコレクションは凄いぞ! <特集>) <Z11-97> 及び雑誌『みすず』連載で未完に終わった, 西田長壽『明治新聞雑誌文庫の思い出』<リキエスタ>の会, 2001 <UC126-G42>を追加しておく。
- 6) 「殖民協会成立の経過」「設立趣意書」「規則」「役員姓名」「会員姓名」等が『殖民協会報告』第1号に掲載されている。殖民協会の評議員(設立時28名)には、「政教社」メンバーを中心に、現職議員・官僚出身者・実業家・学者・ジャーナリストなど錚錚たる顔ぶれが並ぶ(例えば、星亨, 金子堅太郎, 小村寿太郎, 近衛篤磨, 安藤太郎, 田口卯吉, 三宅雪嶺, 島田三郎, 志賀重昂, 柴四郎, 杉浦重剛など)。会員についても「相当の業務を有するか、社会的地位を有する者を標準に、紹介・考査を経る」ことが要件とされていた(『殖民協会規則』)。殖民協会は「広く国民の間に根をおろした団体というよりも、榎本の人脈を中心とした特定の選ばれた人々の団体であった」という指摘もある(児玉解説, 570.「別冊」p.10参照)。佐々木敏二「榎本武揚の移民奨励策とそれを支えた人脈」『キリスト教社会問題研究』37: 1989.3, pp.535-549 (杉井六郎教授退職記念号) <Z9-77>は、榎本武揚の移植民論をアメリカ・カナダへの視点と函館戦争以来の人脈のなかで考察し、「蝦夷共和国の愛」がそのモチーフであるとする。
- 7) 「殖民協会」及び「榎本殖民」につき、以下のものを参照。浅見登郎『海外発展の実際』宝文館, 1929(研究の一「日本人とメキシコの開発」pp.1-319) <594-94ほか>は、『外交時報』に連載された「榎本武揚とメキシコ移住計画(1)-(8)」(『外交時報』551-571: 1928.1.15-9.15)を基にした早い時期の纏め。角山幸洋「榎本武揚とメキシコ殖民移住(1)-(5)」『関西大学経済論集』34(6): 1985.2, pp.983-1053 / 35(1): 1985.5, pp.1-69 / 35(2): 1985.6, pp.155-264 [史料・別表] / 35(4): 1985.11, pp.507-527 / 35(5): 1986.2, pp.761-851 [含 諸新聞掲載移民関係記事, 外務省史料] <Z3-218>は多数の関係資料を含む詳細な研究。『榎本武揚とメキシコ殖民移住』同文館出版, 1986(主要参考文献: pp.229-240, 付表「榎本武揚殖民関係年表」) <DC812-259>として刊行されたが、割愛されている部分もあり、資料的には雑誌論文の方が有用。角山幸洋「榎本武揚と殖民協会(1)

〔含「殖民協会報告」「殖民時報」掲載題目〕『関西大学経済論集』41(2)：1991.7, pp.181 - 294 <Z3-218>は続稿。上野久『メキシコ榎本殖民 一榎本武揚の理想と現実』中央公論社, 1994 (中公新書) (参考文献: pp.164 - 168) <DC812-E180>は, 第二次世界大戦後までの榎本殖民地と入殖者たちの変遷をたどる。角川雅樹「メキシコにおける日系移民とアイデンティティー 榎本植民地建設の理想から百年を経て」東海大学外国語教育センター編『若き日本と世界 一支倉使節から榎本移民団まで』東海大学出版会, 1998, pp.231 - 252 <GB381-G26>は榎本殖民を導入部とするメキシコ日系人調査の概略。このほか, 前掲 199.『日本の移民研究』pp.37 - 38, 113 - 115 所収の文献を参照のこと。

- 8) 『殖民時報』原誌 (69 - 100 号) は, 明治新聞雑誌文庫で全号を所蔵。
- 9) 『殖民協会報告』に転載された北米関係の主な領事報告につき前掲, 『参考書誌研究』No.47, pp.6 - 9 及び各頁注を参照のこと。
- 10) 「東邦協会」は, 会頭副島種臣, 近衛篤磨を副会頭として 1891 年 (明 24) 7 月に設立された。「東洋諸邦及び南洋諸島に関する地理・殖民等の講究」を事業目的とし, 報告及び講談会等によって, その講究結果を世人に示した (『東邦協会事業順序』)。設立時の評議員は榎本「殖民協会」と同じく錚錚たる顔ぶれであり, 重複している者も多いが (星亨, 三宅雪嶺, 志賀重昂, 杉浦重剛など), 協会解散の経緯については不詳であるという (下掲安岡論文, p.61)。協会についての本格的研究は見当たらず, その活動については協会の機関誌『東邦協会報告』東邦協会, 1 - 38: 明 24.5 - 27.7 (欠: 22 号), 以後『東邦協会会報』と改題<雑 21-131>, 『東邦協会会報』1 - 231 号 [通号 39 - 269 号]: 明 27.8 - 大 3.7 <雑 21-131イ>によるしかない【目次・総索引】: 『明治新聞雑誌文庫所蔵雑誌目次総覧 115 (外交編)』に収録。東邦協会に関する希少な研究として, 安岡昭男「東邦協会についての基礎的研究」『法政大学文学部紀要』22: 1976, pp.61 - 98 <Z22-102>, 狭間直樹「初期アジア主義についての史的考察 (5) 第三章 亜細亜協会について, 第四章 東邦協会について」『東亜』414: 2001.12, pp.56 - 75 <Z24-65>がある (財団法人「霞山会」のサイトで, 上掲論文も含め, 『東亜』の最近のバックナンバーを閲覧することができる。(<http://www.kazankai.org/>)。「東邦協会」(『東邦協会報告』→『東邦協会会報』) もいわゆる民間の移植民団体 (機関誌) であるが, その事業目的が専ら「東洋諸邦及び南洋諸島に関する地理・殖民等の講究」にあることから, 本文中には収録しなかった。その他, 「台湾協会」(1898 年, 会頭桂太郎, 『台湾協会会報』)・「東亜同文会」(1898 年, 会長近衛篤磨, 『東亜時論』→『東亜同文会報告』)・「朝鮮協会」(1902 年, 会長島津忠濟, 『朝鮮協会会報』)・「南洋協会」(1915 年, 会長芳川顕正, 『南洋協会会報』→『南洋協会雑誌』→『南洋』) なども同例とした。これら東洋諸邦及び南洋諸島関係の「殖 (植) 民団体」も, 北海道移住に始まる「内国 (植) 殖民論」

から「海外移民・殖(植)民論」(北米→中南米・満蒙等・南洋群島)への、移民論変遷及び移植民の実態を例証するものとして重要である。金子文夫「日本における植民地研究の成立事情」小島麗逸編『日本帝国主義と東アジア』アジア経済研究所, 1979, pp.49 - 92 (研究参考資料 277) <DC664-5>は、これら諸団体の活動, 植民関係官庁の調査・研究及び各大学における植民政策講座などによって、戦前期日本の植民地研究の成立事情を概観する(本書には、国本伊代「戦前期における中南米移民と排日運動」pp.331 - 381 (「排日関係年表」: pp.380 - 381)が収録されている)。金子編「戦後日本植民地研究史」『岩波講座 近代日本と植民地 4 統合と支配の論理』岩波書店 1993, pp.289 - 317 <GB411-E44>は、戦後における日本植民地研究の展開と展望を地域別に概観する。なお本巻には、清水元「アジア主義と南進」pp.85 - 112, 北岡伸一「新渡戸稲造における帝国主義と国際主義」pp.179 - 203, 村上勝彦「矢内原忠雄における植民論と植民政策」pp.205 - 237などが収録されている。

- 11) 『殖民協会報告』から転載(抜粋)された記事は以下のとおり(『高知殖民協会報告』は『報告』と略記)。*渡辺勲十郎「合衆国太平洋沿岸巡回誌-ワシントン州ノ部」(『報告』第2号/『殖民協会報告』第4号掲載)*根本正「墨国探検紀行」(『報告』第2号/『殖民協会報告』第7, 15号掲載)*根本正「墨国『チヤパス』州探検報告」(『報告』第3号/『殖民協会報告』第9号掲載)*根本正「墨西哥探検」(『報告』第4号/『殖民協会報告』第13-14号掲載)*藤田敏郎「墨国太平洋沿岸諸州巡回報告」(『報告』第1-2号/『殖民協会報告』第1-3号掲載)*藤田敏郎「模範移民の適地」(『報告』第2号/『殖民協会報告』第6号掲載)
- 12) 高知殖民協会委員, 長野源吉は, 協会幹事に宛てた手紙のなかで「高知殖民協会」と「殖民協会」の連絡の必要性を説き, 会員1名を協会の負担により「殖民協会」に加入させるべき旨述べている(明26.8.12付書簡, 『報告』第1号, pp.26 - 27)。一方, 短期間ながら, 『殖民協会報告』「雑録」には, 「高知殖民協会」関連記事が掲載されている。第3号(明26.6)には「今般設立なりたる同協会の趣意書並に規則は左の如し」として「殖民高知協会設立趣意書及び規則」が, 第5号(明26.9)には7月の臨時総会において選挙が行われた「高知殖民協会ノ委員」が掲載されている。しかしその後の「高知殖民協会」事業及び解散等の記事については確認できなかった。
- 13) 『高知県歴史辞典』(高知市民図書館, 1980)によれば, 「高知殖民会」は, キリスト教徒で民権運動家であった武市安哉(衆議院議員, 筆者補注)が結成した移民の組織で, 1893年(明26)7月(6月27日及び7月1日, 筆者補注), 第一次移民31名を送った。1894年4月に第二次移民を送り, 1900年には移民300戸・人員1600人に達し, 武市の信仰は聖園教会として団結の中心となった。(傍点筆者)とある。しかし, 海外への移殖民に関して言えば, 「榎本殖民団」員のなかに高知県出身者はいなかったし, また, 米国への出稼ぎ労働

者を要請する在米高知県人からの書簡が、『報告』第2号(明27)に二通掲載されているが、その後の経緯については明らかでない。上記引用のように、高知殖民協会(高知殖民会)は「武市安哉が北海道開拓のため結成」『高知県歴史辞典』となっている。協会規則は、「会頭は総会に於て之を選挙し任期一ヶ年とす」(第5条)と定めているが、明治26年7月29日の臨時総会で「会頭及び副会頭は之を置かず当分幹事に於て其事務を取る」と議決され、新委員の選挙が行われている。この時、武市は幹事にも委員にもなっていない。協会発足前の発起人会には度々出席しているので、発起人のうちの一人とみるべきであろう。この時武市は、自ら第一次移民として、既に北海道へ渡っていたのである。この間の経緯につき、武市安哉より山田平左衛門宛て手簡(第1号, pp.23-25)及び「本会の経過(前号より続く)」(第2号, pp.22-24)を参照のこと。

本稿脱稿寸前、田中彰・桑原真人『北海道開拓と移民』吉川弘文館、1996<GC5-G7>という研究の存在を知った。土佐藩時代末期の蝦夷地への関心に始まり、高知県民の北海道への投資活動や移住・開拓という現象に発展していく過程をトータルに叙述し、その問題意識を、近年日本における移民研究の動向を踏まえた「はじめに 一本書の課題」において示している。「序章 北海道移民開拓史研究の動向」「第一章 明治維新と北海道」「第二章 高知藩と分領支配」「第三章 高知県の北海道移民—その統計的概観」「第四章 高知県民と北海道開拓」「第五章 高知県民の団体移住—その諸事例」「第六章 高知県の屯田兵」という構成。107頁以降第五章を中心に、武市安哉及び聖園農場に関する記述があり、武市が制定した「高知殖民会規則(案)」全七条(『高知県史 近代編』pp.307-308より引用)を掲出している。その第一条は「本会は高知殖民会と称し、高知県人にして北海道移住の実行を企図するものより成立す。」と規定している。これが何時の時点で起草されたものか定かではないが、明治26年5月29日の第三回発起人相談会(武市も出席)を経て、6月12日の集会において起草・配布された、「海外及び北海道等への殖民」を目的として規定する「高知殖民協会規則」とは内容的に大いに相違している。武市は、前述したように、「高知殖民協会」設立直後の6月27日に北海道への第一次移住者を率いて高知を離れているのである。「高知殖民会」と「高知殖民協会」との異同・関係及びその規則(目的)改定の経緯については、更なる検証に委ねたい。『高知県史 近代編』高知県、1970(「第六章 経済と社会/第五節 開拓移住と海外移民」pp.303-323)<218.4-Ko6753k2>及び『聖園教会史』日本基督教会聖園教会、1982<HP115-47>も参照のこと。筆者資料不知のため、この件につき下記注14)北海道開拓の部分も含め、記述がとりわけ冗長になっていることをご寛恕願いたい。

なお、明治三十年代後半からの、移民会社による高知県における移民事業については、問宮國夫「水野龍と皇国殖民会社についての覚書—『高知県移

民史研究』の一齣『社会科学討究』44 (2) : 1999.1, pp.285 - 307 <Z6-289>及び「移民会社とブラジル移民の動向 —高知・竹村植民商館の設立と第二回移民の場合」『社会科学討究』41 (3) : 1996.3, pp.941 - 984 (中村尚美教授退職記念号) <Z6-289>が系統立っている。

- 14) 「本会の経過 (前号より続く)」のなかに、「北海道協会」「本会北海道支部」(先願者たる)「北越植民協会」という表記がある(『報告』第1・2号, pp.23 - 25 pp.22 - 24)。また、『植民協会報告』第8号(明26.12)「雑録」に、同年11月19日一ツ大学講義室で行われた「北海道協会講談会」次第が掲載されている。北海道協会は「1893年(明26)設立。本州と北海道との係を密にしつつ開発を促進することを目的に、北海道に関係の深い貴衆両議員・大地主・実業家・道庁官吏らによって構成された官民一体の団体で、初代会頭は近衛篤磨、東京に事務所を置き、北海道拓殖についての調査研究・宣伝及び国会・政府への建議を行い、初期には移住者の保護事業も行っている(『北海道大百科事典』北海道新聞社, 1981)。ここで、「植民協会」「東邦協会」及び「北海道協会」に深く関与した近衛篤磨に着目する必要がある。五撰家筆頭当主近衛篤磨の多彩な経歴については、屋上屋を重ねるまでもないが、時代的要請とはいえ、後述する「政教社」同人と同じく、国内外の移植民事業にこれほど多く関わっていたことは重要であろう。近衛については、明治28年2月から同36年3月までの日記及び近衛の論文・意見書・草稿、その他関係文書・資料を収録する、近衛篤磨日記刊行会編『近衛篤磨日記』全5巻・別巻1, 鹿島研究所出版会, 1968 - 69(「近衛篤磨年譜」: 別巻, pp.697 - 706) <289.1 - Ko6463k>が基本的史料として刊行されている。工藤武重『近衛篤磨公』大日社, 1938 <745 - 65ほか>をはじめ、従来、伝記的なアプローチによる研究が多いなか、博士論文のために、旧姓相原名で発表した一連の論稿を纏めた、山本茂樹『近衛篤磨 —その明治国家観とアジア観』ミネルヴァ書房, 2001 (Minerva 日本史ライブラリー 10) (年譜「近衛篤磨とその時代」: pp.301 - 308) <GK76 - G107>が、諸資料及び先行研究をふまえた実証的であり、まず参照されるべきものとなっている。近衛の「北海道拓殖論」及び「北海道協会」への関与と「東邦協会」との関係については、「第六章 北海道論とアジア主義の論理的連関」pp.149 - 172 (初出「近衛篤磨の北海道論 —アジア主義との論理的連関」『日本文化環境論講座紀要』1: 1999.1, 縦書き pp.1 - 21 <Z71 - C138>) を参照のこと。山本によれば、近衛の「北海道拓殖論」(「北海道拓殖論」『太陽』1 (7): 明28.7, pp.1 - 3及び「北海道拓殖の急務」『立憲改進黨々報』47: 明28.8, pp.7 - 8など)は、国防が第一義でその経済的要素は第二義的に過ぎない、としている(p.161)。近衛がコミットした集団及び組織について、瀬岡誠「近衛篤磨と関係集団」『社会科学』(同志社大学人文科学研究所) 54: 1995.1, pp.1 - 38 (覇権構造と政策協調<特集>) <Z6-279>があるが、「近衛がコミットした集団・組織は異常に多く、

一つ一つとりあげることは到底不可能である」としている。国立国会図書館憲政資料室では、「東亜同文会」関係・意見書・日記を含む、陽明文庫蔵「近衛篤磨関係文書」(マイクロフィルム)を所蔵しているが、内容詳細につき精査していない。

「高知殖民協会」「北越殖民協会」のような、各県単位の「殖民協会」の存在及び活動については、余り知られていないところであり、各県史・地方新聞及び公文書等による、より綿密な調査が必要であると思われる(後掲587.『日本移民協会報告』第4号:大4, p.32には「広島殖民協会の成立」という記事が掲載されている)。

また、明治初期のロシアの南下政策への対抗及び殖産興業政策、士族授産としての北海道開拓・移住と海外移住民との関係についても未調査である。北海道開拓については多くの研究成果がある。就中、定説となっているのが、永井秀夫「北海道開拓政策の転換―道庁の設置を中心として」『北海道大学文学部紀要』7:1959.3, pp.55-75<Z22-96>(関秀志編『北海道の研究5近・現代篇I』清文堂出版, 1983, pp.37-65<GC5-136>に一部削除・改訂のうえ再録。本書は開拓使設置、開拓移民と地域社会及びアイヌ民族など開拓に関する諸問題をさまざまな角度から取り上げている。)及び「殖産興業政策論」『北海道大学文学部紀要』10:1961.11, pp.129-158<Z22-96>である。『明治国家形成期の外政と内政』北海道大学図書刊行会, 1990<未所蔵>は、明治国家形成過程における国際環境のなかでの、国家指導者層の政策目標と対外政策及び外政と内政の関連を検証する。永井の研究業績について「永井秀夫先生業績一覧」『北大史学』29:1989.8, pp.54-6<Z8-104>が一覧する。関秀志編『北海道の研究8文献目録・索引篇』清文堂出版, 1988(「14.拓殖・開発・移民」pp.156-163)も参照のこと。北海道開拓・移住と海外移住民との関係については、上掲『北海道開拓と移民』の共著者、桑原真人「北海道開拓論に関する覚書―海外移住論との関連で」『新しい道史』52:1972.6, pp.1-18<Z8-478>が北海道開拓論における移民=労働力問題を中心に考察し、同時期に興隆をみた「海外移住論」との関連で分析している。桑原は、明治14年の「開拓使官有物払下事件」以降日清戦争終了後までの約20年間の論調を「殖民論一般」「北海道論・北海道開拓論」「海外移住論」に分類・表示する(第一表「明治前期における北海道開拓論と海外植民論」pp.13-18)。表出論説等は、『東京経済雑誌』『国民之友』『鼎軒田口卯吉全集』『若山儀一全集』『福沢諭吉全集』『陸羯南全集』『中江兆民著作目録』(桑原武夫『中江兆民の研究』)などから採録し、黒田謙一『日本植民思想史』<334.71-Ku72ウほか>・吉田秀夫『日本人口論の史的研究』<334.1-Y86ウほか>等で補正している。これにより、「明治二〇年代を中心とした時期には、北海道開拓=国内移住論と共に海外移住=殖民論が、同時的に存在し、主張され…北海道植民から海外植民への転換点を求めるならば、明治二十年代の「始め」ではなくて

「終り」=日清戦争期にそれを設定すべきであろう。」としている (p.4)。本論稿は、近代北海道地方史に関する桑原の他の論稿とともに、『近代北海道史研究序説』北海道大学図書刊行会、1982 <GC5-142>に再録されている(「第一章 北海道開拓論の興隆／第一節北海道開拓論の興隆」pp.19-43)。田村真雄「内国殖民地としての北海道」『岩波講座 近代日本と植民地 1 植民地帝国日本』岩波書店 1993, pp.87-99 <GB411-E44>は、内国殖民地としての北海道の複雑性を寸描する。

また、近年の脱領域的な言説研究からのアプローチとして、小森陽一「『保護』という名の支配—植民地主義のボキャブラリー—」小森陽一・紅野謙介〔ほか〕編『メディア・表象・イデオロギー—明治三十年代の文化研究』小沢書店、1997, pp.319-334 <GB451-G1>が示唆的である。

- 15) 『労働世界』の原紙は、労働運動史料委員会による573複製当時(1960年)「…その実物の所在が明らかでなかったばかりでなく、事実わが国の大学研究所等では辛うじてその一小部分を珍藏するにとどまっていた状態…」(573複製版、大河内一男「刊行のことば」)であるが、NACSIS Webcatの検索によれば、国内の7大学で、573複製版と同じ号数を所蔵している(欠号分も同じ)。これは、未確認ながら、『労働世界』原紙と573複製版の混同であると思われる。ちなみに、明治新聞雑誌文庫では11、47号のみ所蔵となっている。
- 16) 高野房太郎とわが国労働運動の黎明については、例えば以下のものを参照。片山潜・西川光二郎『日本の労働運動』労働新聞社、明34 <YDM41609>(明治文化研究会編『明治文化全集 6 社会篇』日本評論新社、1955 <081.6-M448-M(t)>、明治文化研究会編『明治文化全集 22 社会篇(上)』日本評論社、1993(複製) <GB415-G11>に再録)、岩波書店、1952(岩波文庫、片山潜著・山辺健太郎訳「日本における労働運動—社会主義のために(英語版)」を合刻) <366.6-Ka592n>は、米国から帰国(明29)以降、日本の労働者階級開放に生涯を捧げた片山が、西川光二郎とともに、日本労働運動の成立期を総括する古典的著作。高野房太郎編『工場法案に対する意見書』労働組合期成会、明31 <YDM37556>、ハイマン・カプリン編著『明治労働運動史の一齣—高野房太郎の生涯と思想』有斐閣、1959 <366-Ta354m-K>、明治文化研究会編『明治文化全集 15 社会篇(続)』日本評論新社、1957 <081.6-M448-M(t)>、明治文化研究会編『明治文化全集 23 社会篇(下)』日本評論社、1993(複製) <GB415-G11>、松本三之介編『近代日本思想体系 32 明治思想集』筑摩書房、1990 <HA121-9>などに高野の論稿を収録する。高野房太郎著、大島清・二村一夫編訳『明治日本労働通信—労働組合の誕生』岩波書店、1997(岩波文庫) <EL231-G24>は、ゴンパース(ゴンパースとも)宛書簡、米国の労働組合機関誌(『アメリカン・フェデレイションニスト *American Federationist*』)ほか)への寄稿、『労働世界』掲載の論稿などこれまで未収録の資料を多数収録。巻末、二村一夫「高野房太郎小伝」

(pp.491 - 540) も有用である。ゴンパーズは「高野房太郎によって日本にまかれた種子が日本労働組合友愛会という組織となって結実したことを信じて疑わなかった」と、その自伝で述べている (サムユエル・ゴンパーズ著、S・ゴンパーズ自伝刊行会訳『サムユエル・ゴンパーズ自伝 —七十年の生涯と労働運動(下)』日本読書協会、1969 (S・ゴンパーズと世界労働史年表: pp.608 - 624) p.179 <GK439-1>) また、日本人移民制限問題に対する彼の立場につき、同 pp.257 - 276 を参照のこと。立川健治「高野房太郎、一在米体験を中心として」『史林』65 (3) : 1982.5, pp.107 - 136 <Z8-342>は、高野の思想を在米体験の分析により論証する。立川健治「労働組合期成会・鉄工組合の『大阪支部』結成をめぐる動向(上)(下)」『大阪地方社会労働運動史編集ニュース』4 : 1982.5, pp.2 - 4 / 5 : 1982.6, pp.1 - 3 <未所蔵>は、労働組合期成会鉄工組合大阪支部結成とその後の動向に関する検証。関連して、大阪社会労働運動史編集委員会編『大阪社会労働運動史 1 戦前篇(上)』大阪社会運動協会、1986 <EB25-175>がこの時期大阪の組合運動状況を纏める。前掲 399.ユウジ・イチオカ『一世 —黎明期アメリカ移民の物語り』(「第三章労働組織とアメリカの組織労働/初期日本人移民の労働団体, pp.101 - 105) <DC812-E145> (398.The Issei, pp.91 - 95 <DC812-A22>) は、高野の在桑時代とゴンパーズとの関係を叙述する。当時のサンフランシスコ日系社会では、亡命民権家による『愛国』(「愛国同盟(在米国日本人愛国同志同盟会)」機関紙)及び殖民・海外事業にも力点をおく『遠征』(「実業社」→「遠征社」機関誌)がジャーナリズムを二分していた。高野は『遠征』誌上で、最低賃金制をめぐる『愛国』記者と論争を戦わせている(上掲『明治日本労働通信』1997, 岩波文庫, pp.294 - 308 に再録)。日本国内の自由民権派と連係した『愛国』と「政教社」と強固な繋がりを有した『遠征』, この対立の構造は、「移民論」興隆期の日本社会の論壇状況をも反映したものであった。初期サンフランシスコにおける日系コミュニティ及びそのジャーナリズムについて以下のものを参照のこと(すべて前掲)。143. 蛸原『海外邦字新聞雑誌史』, 144. 田村・白水編『米国初期の日本語新聞』, 280. 同志社大学人文科学研究部編『在米日本人社会の黎明期 —「福音会沿革史料」を手がかりに』, 462. 田村『アメリカの日本語新聞』, 531. 新井・田村「自由民権期における桑港湾岸地区の活動」, 533. 町田市立自由民権資料館編『アメリカからの便り — 1880/90年代の渡米青年たち』, 399. イチオカ『一世 —黎明期アメリカ移民の物語り』, 398. The Issei, 及び『参考書誌研究』No.54, 注56) 57), pp.126 - 127。

なお、上掲『明治日本労働通信』の共編者二村一夫は、「法政大学大原社会問題研究所」のスタッフ個人サイトで『二村一夫著作集』をオンライン刊行している (<http://oohara.mt.tama.hosei.ac.jp/nk/index.html>)。このサイトは、過去に発表された論文やエッセイ等を加筆、再録するのみならず、『高野房太郎とその時代』(第6巻)などの書き下ろしも掲載している。そのほか、第7

卷『高野房太郎研究ノート』, 別巻2『新資料発掘』, 別巻3『高野房太郎関係資料 一書簡と日記』, 別巻4 *Correspondence between F. Takano and S. Gompers*, など高野房太郎に関する資料が満載されている。また, 付録3『明治日本労働通信』(岩波文庫) 補訂では, 上掲『明治日本労働通信 一労働組合の誕生』刊行後の新資料の増補, 及び二村による解説「高野房太郎小伝」の訂正を行っているので, 併せて参照されたい。日本の労働運動史関係資料については, 本著作集第3巻『日本労働運動史参考文献案内』が便利である。資料の調査方法についても得るところの大きい, 刮目に値するサイトである。大原社会問題研究所電子図書館・資料館(大原デジタルライブラリー)でも, オンライン展示「高野房太郎と労働組合の誕生」を公開している(<http://oohara.mt.tama.hosei.ac.jp/takano/index.html>)。大原社会問題研究所編『日本社会主義文献 第1輯 一世界大戦(大正三年)に到る』同人社書店, 1929<363.031-O354nほか>及び細川嘉六監修, 渡部義通・塩田庄兵衛編『日本社会主義文献解説 一明治維新から太平洋戦争まで』大月書店, 1958<363.031-W93n>は, わが国の社会主義関係文献の体系的解説書として, 未だに類書の追随を許さぬ先駆的レファレンスである。また, 初期社会主義の研究動向については, 『初期社会主義研究』(年刊)<Z6-2186>が特集関連論稿のほか「初期社会主義研究関係文献目録」を収載し, 有用である。初期社会主義運動の機関紙の変遷につき, 市原実〔ほか〕監修・日本機関紙協会大阪府本部編著『機関紙の歴史 一戦前・戦中編』日本機関紙出版センター, 1999(「第4章 労働組合と社会主義運動の初期機関紙」pp.85-110)<UC191-G11>が簡便である。

- 17) 安部磯雄は「社会主義協会」会長。1891年(明24)渡米して, ハートフォード神学校に学んだ。帰国後1903年(明36)早稲田大学講師となり, 1905年, 野球部部长として早大野球部を率い, 日本野球チーム初の米国遠征を果たしている。成績は7勝19敗と惨敗だったが, ポテト王・牛島謹爾はじめ在留日本人の絶大なる歓迎を受けたという。同年, 移民奨励論『北米之新日本』<YDM41361>(前掲278.『日系移民資料集 北米編3』<DC812-E118>に収録)を刊行。社会主義者のなかでは, 片山と比肩しうる渡米奨励論者であった。安部のハートフォード神学校時代については, 山泉進「安部磯雄のハートフォード神学校時代」『初期社会主義研究』9:1996.9, pp.57-83(平民社群像 一予は如何にして社会主義者となりし乎<特集>)<Z6-2186>が詳細に解説する。『安部磯雄の研究』早稲田大学社会科学研究所, 1990(研究シリーズ26)<GK31-E10>も参照のこと。安部は1959年「野球殿堂」入り, 旧「安部球場」に名を残した。『日本之下層社会』の著者横山源之助は, 有機逸郎の名で明治39年『海外活動之日本人』(前掲295)を著し, 生活問題解決の一策としての移殖民問題を論じている(『参考書誌研究』No.52, pp.26, 72-73, 61)。『横山源之助全集 第1巻 日本の下層社会』明治文献, 1972<US21-43>に, 『国

民之友』及び『労働世界』に掲載された横山源之助の論文が収録されている。また、2000年10月から、立花雄一編集『横山源之助全集』全9巻・別巻2(社会思想社)の刊行が開始された。本全集は、構成を「社会・労働」「富豪史」「殖民」「文学」及び「別巻」とし、今までに発見された横山源之助の全業績(単行書、新聞・雑誌掲載作品)を年代順に収録するという方針であった。第1巻-3巻が社会・労働(1-3)、第7-8巻が殖民(1-2:明治35年~大正4年までの記事・論説等百篇余、『大阪朝日新聞』ブラジル殖民事情調査報告、『海外活動之日本人』、『南米渡航案内』を収録予定)にあてられ、期待された企画ではあったが、出版社の倒産により刊行が頓挫している。これまでに第1-2巻及び別巻1の刊行が確認されている。

- 18) 片山はこの間の経緯を、『(再刊)労働世界』創刊号(明35.4.3)の英文欄及び『日本の労働運動』(1952, 岩波文庫版, 注16参照)で回想している。
- 19) 旧『労働世界』は、27号(明32.1)以降「社会主義欄」を設け、「本誌に社会主義欄を設くるの主意」において、社会主義の積極的な支持者としての立場を表明し、社会主義的論調を色濃くしていた。『労働世界』6年1号掲載の「渡米協会」会則は、「渡米を奨励することを目的とし、『労働世界』直接購読者を会員とし、会費は不要。渡米希望者の質問・相談に応じ、渡米者に忠告を与え、紹介の労を執る」と定めている。また、本稿冒頭で「渡米協会」の設立を1902年4月(明35)と記したが、その設立の正確な月日を記している資料は見当たらない。片山にとって「渡米奨励・援助」は、「当時の社会状況からいって、思想的にも心情的にも社会運動の一環だった」(下掲立川「時代を吹き抜けた渡米論・片山潜の活動をめぐって」p.97)のであり、社会主義運動となんら齟齬するものではなかったのである。これは、キリスト教社会事業としての島貫兵太夫「日本力行会」(本号, pp.71-72参照)とも共通する位相であった。『労働世界』刊行及び論調の詳細につき、下掲中林『ある明治社会主義者の肖像』2000(「三渡米協会」pp.35-48), 577.労働運動史研究会編『労働世界I』の隅谷三喜男「解説」(pp.III-XI)を参照のこと。

【片山潜】の著作及び参考文献については、『参考書誌研究』No.52, p.61, 注65) pp.86-87及び付表を参照のこと。就中、立川健治「時代を吹き抜けた渡米論・片山潜の活動をめぐって—立志・奮闘のイデオロギー」『汎』4:1987.3, pp.96-123 <Z23-548>が、「渡米協会」会費の変遷・会員渡米者数・例会演説会等について整理し、有用である。また、片山の盟友にして後に袂を分かつことになる、山根吾一(『渡米雑誌』主幹)についての岡林伸夫による一連の論稿、「ある明治社会主義者の肖像—山根吾一覚書」「山根吾一と雑誌『社会主義』」「『渡米雑誌』の出發—山根吾一の活動」「片山潜との訣別—山根吾一の活動・その後」『渡米雑誌』から『亜米利加』へ」「アメリカ排日問題と山根吾一」(何れも『同志社法学』243, 245-248, 250 <Z2-3>に掲載, 掲載順に配列)は、加筆訂正のうえ、「あとがき—その後の山根吾一と

山根千代」を加え、『ある明治社会主義者の肖像 —山根吾一覚書』不二出版、2000 <GK158-G34>として纏められている。岡林『『ある明治社会主義者の肖像』続稿 —山根吾一覚書始末』『初期社会主義研究』14：2001, pp.161 - 179 (兆民と秋水 —没後100年と『帝国主義』<特集>) <Z6-2186>は、同書刊行後の新情報発見とその顛末を記す。これら新情報の成果を繰り入れて、『山根吾一年譜』(同誌, pp.180 - 194)を作成している。

- 20) 『社会主義』刊行及びその論調の詳細につき、上掲岡林『ある明治社会主義者の肖像』2000 (「六 『社会主義』」 pp.75 - 96), 579.労働運動史研究会編『社会主義 I』の岸本英太郎「解説」(pp.Ⅲ - XIII)を参照のこと。
- 21) 『渡米雑誌』刊行及びその論調の詳細につき、上掲岡林『ある明治社会主義者の肖像』2000 (「九 『渡米雑誌』」 pp.131 - 156)を参照のこと。『社会主義』時代からの寄稿者で、後にいわゆる「大逆事件」(1911年, 明44)に連座して死刑となった紀州新宮の医師、大石誠之助と山根『渡米雑誌』との関係について、岡林伸夫「大石誠之助と『渡米雑誌』<資料紹介>」『初期社会主義研究』12：1999, pp.329 - 336 <Z6-2186>は、大石「在米修学とコック」(山根吾一編『最近渡米案内』所収)を紹介し、解説する。大石について、『牟婁新報』<YB-343ほか>(1900:明33.4 - 1925:大14, 毛利紫庵が主宰した紀州田辺の地方紙。「社会主義運動は紀州の海岸から」と堺利彦に言わしめたように、大石はじめ幸徳秋水・堺利彦・南方熊楠らが論陣を張り、菅野すが・荒畑寒村らが記者として健筆を揮った。), 森永英三郎・仲原清編集『大石誠之助全集』全2冊, 弘隆社, 1982 <EB25-143>, 森永英三郎『禄亭大石誠之助』岩波書店, 1977 <GK112-14>なども参照。「大石誠之助は死にました、いい気味な、機械に挟まれて死にました…」で始まる、与謝野鉄幹の追悼詩「誠之助の死」(与謝野寛『鴉と雨』東京新詩社, 大4 <YD5-H-特102-968>, 『鴉と雨』至芸出版社, 1988 (至芸出版翻刻叢書) <KH739-E52>などに復刻, 再録)は夙に有名。

片山のテキサス米作経営については、「テキサス米作論」が『東洋経済新報』305 - 306号：1904.5.25 - 6.25に掲載され、『渡米の秘訣』渡米協会, 明39 <YDM26923> (上掲『近代欧米渡航案内記集成』第4巻に復刻収録)にも纏められているが、参考文献として、例えば以下のものを参照のこと(テキサスの米作経営一般については主題別主要文献で後掲の予定)。上掲立川「時代を吹き抜けた渡米論・片山潜の活動をめぐって」pp.109 - 112, 菊川貞巳「片山潜とテキサス米作」『経済経営論叢』32(3)：1997.12, pp.35-57 <Z3-352>, Orii, Kazuhiko, and Hilary Conroy “Japanese Socialist in Texas :Sen Katayama.” Amerasia Journal, 8(2)：1981, pp.163 - 170 <未所蔵, 国立国会図書館所蔵は14(1)：1988~>, 前掲396.The Japanese Texas.<移(四)-Y26>, 邦訳397.『テキサスの日系人』<DC812 - G50> (『参考書誌研究』No.52, p.53, p.87参照)。

- 22) 『亜米利加』11年11月号(1907.11.1)に掲載された、幸徳秋水「渡米せしむべき人」をめぐる動きにつき、岡林伸夫「幸徳秋水『渡米せしむべき人』<資料紹介>」『初期社会主義研究』11:1998.12, pp.258 - 264 <Z6-2186>を参照のこと。大河内一男『幸徳秋水と片山潜』講談社, 1972(「幸徳秋水・片山潜関連年表」; pp.251 - 256, 講談社現代新書)<GK76-21>は、対照的な二人の協調・対立のなかに、日本の社会主義運動の「宿命的特徴」を見る。
- 23) 『亜米利加』刊行及び論調の詳細につき、上掲岡林『ある明治社会主義者の肖像』2000(「十五『亜米利加』」pp.247 - 272, 「十六 米友倶楽部と排日問題」pp.273 - 292 及び「十七『日米通信』」pp.293 - 316)を参照のこと。「日米未来戦記」ブームの詳細については後掲するが、例えば、横田順彌『明治「空想小説」コレクション 一百年前のイマジネーション』PHP 研究所, 1995 <KG381-G12>, 猪瀬直樹『黒船の世紀 一ミカドの国の未来戦記』小学館, 1993(参考文献: pp.518 - 530) <KH191-E364>, 『黒船の世紀 一ガイアツと日米未来戦記』文藝春秋, 1998(参考文献: pp.502 - 521, 文春文庫) <KH191-G224>を参照のこと。
- 24) 『渡米』につき、上掲岡林『ある明治社会主義者の肖像』2000, pp.295 - 297 及び立川「時代を吹き抜けた渡米論・片山潜の活動をめぐって」pp.117 - 120を参照のこと。
- 25) 高貫兵太夫の著作及び参考文献につき、『参考書誌研究』No.52, p.61 及び注 p.87を参照。Q & A 方式で渡米希望者の疑問に答える『最近渡米策』(日本力行会, 明 37)が、上掲注 2) 所収『近代欧米渡航案内集成』ゆまに書房, 2000, 第 3 巻に収録されている。また同『集成』第 4 巻には、片山・山根確執後の「渡米論」、片山潜『渡米の秘訣』(出版協会, 明 39)と山根吾一編『最近渡米案内』(渡米雑誌社, 明 39)が併録されている。このような「渡米奨励論」に対しては、先に幸徳秋水の批判「渡米せしむべき人」を引用したが、皮肉にも、自らがその思想的母胎として依った社会主義陣営からも、名指して批判が相次いだことは重要である(岡林『ある明治社会主義者の肖像』2000, pp.217 - 224 参照)。
- 26) 「日本力行会」について、『参考書誌研究』No.52, 注 66) p.87を補記する。正史として、(永田稠著)『日本力行会創立五十年史』全 2 冊(海外篇共)日本力行会, 1946 - 1949(海外篇の書名: 力行五十年史海外篇) <F4-31>, (永田稠著)『力行会七十年物語』日本力行会七十年記念委員会, 1967 <未所蔵>及び日本力行会創立百周年記念事業実行委員会, 記念誌編纂専門委員会編『日本力行会百年の航跡 一豊肉救済・海外発展運動の展開、国際貢献』, 日本力行会, 1997(「日本力行会百年々譜 1867 - 1997 年」: pp.504 - 528, 参考図書: p.502, 「力行会関係出版目録」: p.503) <F4-G72>がある。相沢源七『力行会とは何ぞや』(宝文堂出版, 1980 <Y88-2810>)は、高貫の自伝『力行会とは何ぞや』(警醒社, 明 44 <YDM21430>)を改稿したもの。永田

稠は、力行会員として渡米中に島貫の遺命を受け帰国、日本力行会第二代会長(大3-昭48)に就任した。永田の生地信州は、元来「信濃教育会」が五大教育方針の一つに「海外発展主義教育」を掲げ、日本でも有数の海外進出の意気に富む県であった(在米ジャーナリストで『暗黒日記』で有名な清沢洸は安曇野「研成義塾」出身、『ユタ日報』発行者寺沢国子は飯田出身。『参考書誌研究』No.54, pp.97-98, 99-100参照)。信濃教育会については、信濃教育会編著『信濃教育会五十年史』信濃教育会, 1935<225.1-125>, 『信濃教育会九十年史』1977<FC27-43>ほか多数の文献がある。機関誌『信濃教育会雑誌』(1-251号)→『信濃教育』(252号~)は、国立国会図書館では、『信濃教育』289号:明43.11~<Z7-276>, 復刻版:1-889号:明19.10-昭35.12<Z7-276>, マイクロ資料:1-482号:明19.10-大15.12<YA-37>を所蔵。協会が鼓吹した満蒙開拓の功罪を検証するものとして、長野県歴史教育者協議会編『満蒙開拓青少年義勇軍と信濃教育会』大月書店, 2000<GB521-G171>も参照のこと。永田は力行会長就任後1922年12月(大11), 「県民の海外発展に関する諸般の事項を調査研究し其の発展に資する」(「信濃海外協会規約」第一条)ため「信濃海外協会」を設立, 以後南米アリアンサ移住・満蒙開拓など移民県長野の海外発展に挺身した。永田稠『信濃海外移住史』信濃海外協会, 1952(「第十二章 信濃海外発展年表」pp.285-300)<DC812-81>, 永田『信州人の海外発展』日本力行会印刷部, 1973<DC812-46>及び同志社大学人文科学研究所編『松本平におけるキリスト教—井口喜源治と研成義塾』ほか「研成義塾」関係文献(『参考書誌研究』No.54, 注46)p.87)を参照のこと。信濃海外協会の機関誌は『海の外』(1922年:大11創刊, 1944年3月:昭19協会解散と同時に廃刊—後継は「長野県開拓協会」及び『信濃開拓時報』—国立国会図書館未所蔵, 日本力行会で部分的に所蔵, 県立長野図書館所蔵についてはNACSIS Webcatヒットなし)。また『海の外 [内地版]』信濃海外協会海の外社, 1輯:1933.7(昭8)—があるが, 所蔵:県立長野図書館<1-7:1933-33>/大分大学経済学部教育研究支援室<2-6:1934-1935>/北海道大学附属図書館<60-77.79-31,141,144,147,150,153,156:1927-1935>と, 号数と発行期間が一致しない。『海の外』信濃海外協会, 所蔵:県立長野図書館<7, 9-24:1951-53>は, 1950年10月22日(永田『信濃海外移住史』P.319による。再興された協会長林虎雄の同書序文では2月となっており齟齬がある)再興された信濃海外協会の機関誌。桑井『外国人をめぐる社会史』は, 研成義塾生渡米に力行界員が関与したことについての, 塾長井口喜源治の言葉(『海の外』7号)を引用しているが(p.34), どの版の『海の外』なのか, 詳らかでない。永田については, 永田久・林寿雄『永田稠の生涯と思想』日本力行会, 1986<未所蔵>がある。また, ブラジル・サンパウロ州にあるアリアンサ移住地とユバ(弓場)農場の歴史を綴る『ありあんさ通信』が信濃海外協会について多くの頁を割く(<http://member.nifty.ne.jp/GENDAIZA/aliansa/>)。

和田敦彦「流通する<国家>、複製される<信濃>—地域リテラシーと領土の表象」『日本近代文学』66：2002.5, pp.202 - 217 (<流通>からみる日本近代文学<小特集>) <Z13-447>は、信濃教育会及び信濃海外協会の活動(移民情報)と信州人の自己表象との相互関係を考察する。和田「ITと文学研究—移民情報の行方をめぐる問いへ」『国文学 解釈と教材の研究』46(6)：2001.5, pp.122 - 129 (メディアを呼吸する<特集>) <Z13-334>及び「幻灯画像史料の保存と活用について—日本力行会所蔵史料を中心として」『内陸文化研究』2：2002.3, pp.37 - 47 <Z71-F148>では、信濃教育会の全県運動の一つでもあった社会教育幻灯を素材に、移民情報(史料)とその情報環境(プロセス・技術・保存)を問題意識として検討する。

日本力行会創立百周年記念式典は1997年5月11日に挙行。同時に各種記念祝賀行事の一つとして、「日本力行会百年歴史展」が開催され(5月11日-26日公開)、同会発刊及び関係者の著作物とともに機関誌『救世』『力行』『渡米新報』『力行世界』『力行タイムス』『力行網』が展示されている。「日本力行会」のホームページ(<http://www.rikkokai.or.jp/>)を参照されたい。

- 27) 『力行』の創刊年月につき以下のように齟齬がある。立川「明治後半期の渡米熱」(p.389→『力行』明治36年2月発刊)、今井(糸井)「明治期における渡米熱と渡米案内書および渡米雑誌」(p.338→『力行』1号、明治33年)、日本力行会『日本力行会百年の航跡』(p.12→機関誌『力行』明治36年6月発刊, p.503→力行(会機関誌)発行年月：明治36/8)、明治新聞雑誌文庫目録(NACSIS Webcat→1<1900-1900>, 1900=明治33年)
- 28) 修養課程の内容は以下のとおりであった。1.毎朝礼拝 2.聖書輪講 3.基督教研究会 4.立志講話 5.西洋料理 6.米国研究 7.渡米クラブ 8.常識教練 9.感話会 10.雄弁会 11.体育会 12.図書館修学 13.野戦伝道 14.訪問 15.神音研究 16.西洋音楽 17.英語 18.各種労働(『日本力行会百年の航跡』, p.39)。
- 29) 『成功』原誌は国立国会図書館及び明治新聞雑誌文庫で比較的長期間所蔵しているが、完全に所蔵している機関はない。国立国会図書館では、平成15年3月末まで本誌のマイクロフィルム化作業中であり、本稿執筆に際し『成功』原誌を参照することができなかった。

渡米熱の歴史的背景としての「成功」関係文献については前掲した(『参考書誌研究』No.52)。ここでは、雑誌『成功』及び『殖民世界』関係文献について、最近の研究を含め、再掲する。竹内洋「立身出世主義の系譜と論理—明治時代を中心に」『関西大学社会学部紀要』7(1)：1975.11, pp.33 - 49(創立九十周年記念特輯)<Z6-671>は、近代日本の立身出世主義を「移動文化」及び「精神構造(史)」としてとらえ、スマイルズ『セルフ・ヘルプ』(中村正直訳『西国立志編』)に始まるその系譜を考察し、スマイルズに影響を受けた村上俊蔵編集『成功』の誌面分析を行う先駆的論稿。竹内『日本人の出世観』学文社、1978(「Ⅲ 日露戦争前後の成功ブームとその変容—雑誌『成功』(一

九〇二～一九一五)に見る] pp.106 - 133) <EC161-13>は、「出世」「成功」に関する既出論稿の纏め。『成功』と『実業之日本』との比較、社会主義・報徳主義との関係について述べる。竹内『立志・苦学・出世 —受験生の社会史』講談社、1991(講談社現代新書) <FB35-E119>も参照のこと。日本の近代化過程における「立身出世」意識の変容とその影響を、浩瀚な史料と広範な視点で描く、Earl H. Kinmonth, *The Self-Made Man in Meiji Japanese Thought: from Samurai to Salary Man*. Berkeley: Univ. of California Pr. 1981 (Bibliography: pp.357 - 371) <HA123-A1>は、その後の多くの研究者が依拠・引用する基本文献。原著刊行から四分の一世紀、漸く日本語版、E.H.キンモンス著、広田照幸〔ほか〕訳『立身出世の社会史 —サムライからサラリーマンへ』玉川大学出版部、1995 <EC153-E102>が刊行された。スマイルズ『セルフ・ヘルプ』の分析をはじめに、『穎才新誌』『少年園』『少年世界』『成功』などの読者層及び投稿欄分析により、1930年代までの「青年の社会史」を実証する(『成功』については「5章 成功青年」 pp.143 - 187)。立川健治「明治後半期の渡米熱 —アメリカの流行」『史林』69(3): 1986.5, pp.383 - 417 <Z8-342>は、「オピニオンリーダー」としての『成功』をはじめ、この期の主要な渡米奨励本・雑誌・新聞を紹介し、渡米熱・成功ブームに隠された意味を探る。資料的にとりわけ有用な論文である。今井(糸井)輝子「明治期における渡米熱と渡米案内書および渡米雑誌」『津田塾大学紀要』16: 1984.3, pp.305 - 342 <Z22-614>は、『成功』の特徴的な記事を紹介し、明治42年までの英語欄以外の「渡米関係記事」をリストアップして便利(pp.340 - 341)。糸井輝子「日米両国の成功雑誌に関する一考察」『アメリカ研究』21: 1987, pp.92 - 109(アメリカの夢<特集>) <Z8-43>は、日米の「成功雑誌」『サクセス *Success*』及び『成功』を、創刊者マーデン及び村上俊蔵の生い立ちと創廃刊の経緯、論説・読者欄などの内容分析により、日米の社会情勢のなかで比較する。両誌を比較した数少ない論稿として重要。雨田英一「近代日本の青年と『成功』・学歴 —雑誌「成功」の『記者と読者』欄の世界」『学習院大学文学部研究年報』35: 1988, pp.259 - 321 <Z22-60>は、記者が読者の悩みや質問に答える「記者と読者」欄の分析を通じ、ライバル誌『実業之日本』の「はがき便」に比べ量的に勝っていること、海外渡航・移民に関する質問が多かったことなどを指摘する。関肇「立志の変容 —国木田独歩『非凡なる凡人』をめぐって」『日本近代文学』49: 1993.10, pp.87 - 99 <Z13-447>は、投稿欄を手がかりに明治30年代の青年層の意識形態を分析。中根隆行「語られる青年文化、<地方>、自然主義現象」筑波大学近代文学研究会編『明治期雑誌メディアにみる<文学>』筑波大学近代文学研究会、2000, pp.226 - 246 <KG314-G30>も、日露戦争後の文化を語るキーワードとして、青年文化・<地方>・文学を取り上げるなかで、「あるべき<地方>像を構築する」ものとしての『成功』の「地方青年」欄を検討する。そこで中根は、支

配文化のイデオロギーを伝達するメディアとしての『成功』の役割を指摘し、これが例えば、『殖民世界』における「殖民文学」として、移殖民政策にも活用されることになるとしている。久保田善丈「“アジア主義者”と雑誌『成功』(1902～16) — “いざない”のなかの中国イメージ」『東洋学報』84(1)：2002.6, pp.87 - 115 < Z8 - 406 > は、アジア主義者が提示した中国イメージとそれを支える「まなざし」の在り方を基調に、これを「執拗に展開した雑誌」『成功』の「記者と読者」欄及び論説を分析する。

上掲注26)で引用した和田敦彦(信州大学人文学部、平成15年3月現在)は、読書論・メディア論の立場から日本の近現代文学を研究しており、そのホームページで、執筆論稿のテキストを掲載するほか、『殖民世界』(1巻1-5号)の目次及び本文の一部をテキストデータ化している(<http://fan.shinshu-u.ac.jp/~wada/index.html>)。和田敦彦「<立志小説>の行方 — 『殖民世界』という読書空間」金子明雄〔ほか〕編『ディスクールの帝国 — 明治三〇年代の文化研究』新曜社、2000, pp.383 - 332(「Ⅲ 内包される<外部> — 越境と漂流」) < KG314-G25 > は、『成功』及び『殖民世界』で「立志小説」「殖民小説」というジャンルを確立した堀内新泉に焦点をあて、「移民」「海外」をめぐる諸現象と、「立志」「実業」をめぐる諸言説の接続の態様及びその受容を、『実業之日本』の誌面をも踏まえ、検討している。和田「<立志小説>と読書モード — 辛苦という快楽」『日本文学』48(2)：1999.2, pp.24 - 34 < Z13-438 > は、その先行的研究。上掲「流通する<国家>、複製される<信濃> — 地域リテラシーと領土の表象」『日本近代文学』66 < Z13-447 > は、長野県における地域メディアと移民情報の流通・再生産に関する考察。また、「ITと文学研究 — 移民情報の行方をめぐる問いへ」『国文学 解釈と教材の研究』46(6)：2001.5, 122 - 129(メディアを呼吸する<特集>) < Z13-334 >、「幻灯画像史料の保存と活用について — 日本力行会所蔵史料を中心として」『内陸文化研究』2：2002.3, pp.37 - 47 < Z71-F148 > などでは、移民情報とその情報環境(プロセス・技術・保存)を問題意識としている。佐野正人「<移動>する文学 — 明治期の『移殖民』表象をめぐる」佐々木昭夫編『日本近代文学と西欧 — 比較文学の諸相』翰林書房、1997, pp.221 - 237 < KG311-G86 > は、明治三十年代における普遍的・近代的な価値形成とボーダーをめぐる<移動する>文学の様相を考察する。小森陽一・紅野謙介〔ほか〕編『メディア・表象・イデオロギー — 明治三十年代の文化研究』小沢書店、1997 < GB451-G1 > 及び金子明雄〔ほか〕編『ディスクールの帝国 — 明治三〇年代の文化研究』新曜社、2000 < KG314-G25 > は、ともに「明治三十年代研究会」の共同研究論集。明治三十年代は、近代国家制度整備期(～明治二十年)と帝国システム胎動期(明治四十年代～)との狭間にある、近代日本の移行期であると言われている(吉見俊哉『メディア・表象・イデオロギー』書評、『朝日新聞』1997.8.24)。ここでとられている、メディアの言説・媒介・受容過程

を、他領域の言説との関係性のなかで捉えなおすというアプローチは、移民研究においても何らかの示唆を与え、また既に一つの流れとなりつつあるようにも思われる。

横田順彌の一連の著作、『明治不可思議堂』筑摩書房、1995 <GB415-E52>、(1998,ちくま文庫<GB415-G18>)、『明治「空想小説」コレクション 一百年前のイマジネーション』PHP 研究所、1995 <KG381-G12>、『明治ワンダー科学館』ジャストシステム、1997 <KH734-G163>、『明治の夢工房』潮出版社、1998 (潮ライブラリー) <UM84-G15>、『快絶社遊「天狗倶楽部—明治バンカラ交遊録」教育出版、1999 (江戸東京ライブラリー 8) <KG311-G134>、『明治ふしぎ写真館』東京書籍、2000 <GB641-G70>などは、『成功』『殖民世界』も含め、明治時代の三大冒険雑誌、『探検世界』(成功雑誌社、1巻1号-12巻6号:明39.5-44.8 <雑19-120>)・『冒険世界』(博文館、1巻2号-4巻5号:明41.2-44.6 (欠:3巻2-5,8号) <雑19-121>)・『武俠世界』(武俠世界社、6巻1号-12巻4号:大6.1-12.3 (欠:10巻6号) <雑52-22><YA5-1072>)の掲載記事を通して、大衆の「壮大な夢」を細部に拘って追求する。長山靖生『偽史冒険世界—カルト本の百年』筑摩書房、1996 (主要参考文献: pp.204-210) <GB31-G9> (2001,ちくま文庫<GB31-G56>)も、同様の視点からこの時期を捉える「周辺」本として参照のこと。

30) 上掲キンモンス『立身出世の社会史』は、一時期『成功』編集長を務めた、石井研堂『明治事物起原』(第十六編 地理部「南極探検の始め」)を引用し(p.158)、糸井「日米両国の成功雑誌に関する一考察」は、『サクセス *Success*』1904年8月号掲載の「『成功』創刊に関する」記事中の、マーデン宛て村上の書簡を引用する(p.95)。

31) 上掲竹内『日本人の出世観』は、『国立国会図書館所蔵明治期刊行図書目録』を基に、1891年(明24)から1912年(明45)までの「明治期成功読本の年次別発刊(種類)数」表を掲出している(p.109)。全48種のうち、1903年(明36)の12種をピークに、1902年から1912年の約10年間に45種(94%)と集中しており、この時期がいわゆる「成功ブーム」期であると言えるだろう(キンモンス『立身出世の社会史』も竹内「表」を引用する。P.149)。ちなみに、明治30~40年代刊行の、国立国会図書館所蔵「苦学(生)」・「成功」「渡米」関係本(但し、主題または副題に各々の語がつくもののみ)は次のとおりである。

(雑誌は省略。重複するものは初出のみ収録。数字は刊行年、明治を省略)

【苦学(生)】30『前賢苦学伝』/34『自立自活東京苦学案内』『活学叢書 第1-7編』(-35)/35『東京苦学遊学手続』/36『異郷の客』『実験苦学案内』『自活苦学生』/37『海外苦学案内』『名流苦学談』『苦学の伴侶』『東京自活苦学案内』/38『苦学成功宮城時雨郎』/39『苦学生の成功』/40『東京苦

学案内』『苦学行商案内』『在米の苦学生及労働者』／41『苦学団』／42『東京苦学の栞』『東京苦学成功案内』／43『苦学の方法』『苦学力行の人』『小学校卒業苦学成功就職手続立身案内』／44『新苦学法』（島貫兵太夫）『新苦学職業学校案内』『米国苦学実記』『実地東京苦学案内』『少年百科叢書 第1－19編』（45）／45『苦学奮闘録』【成功】（明治30～44年刊行で「成功」本は、海外翻訳を含め139件あり。各年主要なもの以外は無作為に抽出。）31『商業百話一立志成功』／32『成功要録』（博文館）／34『成功の秘訣』（島貫兵太夫）『貧兒成功談』／35『富豪家成功憲法』／36『成功の生涯』（奥村多喜衛）『成功綿囊』『成功座右銘』『青年立身訓』（実業之日本社）『学生と成功』／37『在米成功の日本人』『戦時成功事業』／38『成功之恩師』『男子成功談』『成功の心得』／39『空前絶後成功新論』／40『成功と人格』（博文館）『成功の順路』（博文館）『立身成功案内』／41『在米者成功之友』『哲理応用成功自由伝』『満期軍人の成功策』／42『渡韓成功法』（実業之日本社）『実業成功法』『成功之秘訣』／43『最新成功策』『成功之極意』『立志成功策』／44『進歩的成功法』『青年学生立身成功法』『東洋成功規範』／45『出世の階段』『新成功法』『実業成功の秘伝』【渡米】34『渡米案内』（片山潜）『最近正確渡米案内大全』（島貫兵太夫）『渡米の栞』／35『青年の渡米』『渡米ノ栞』『渡米のしるべ』／36『渡米成業の手引』『現今渡米案内』／37『最近渡米策』（島貫兵太夫）『渡米日記及余ノ米国観』『渡米羅針』『新渡米』／38『実地渡米』（島貫兵太夫）『英語知らずの渡米者』『渡米会話』『最新渡米案内』『新渡米案内』／39『最近渡米案内』（山根吾一）『渡米の秘訣』（片山潜）『新撰渡米案内』／41『新撰渡米者必携』『渡米者成功之友』『渡米者必携』／44『新渡米法』（島貫兵太夫）／45『渡米者必携米国事情』

- 32) 上掲日本力行会『日本力行会百年の航跡』p.4, 8ほか参照。渡邊光風『立志之東京』（東京市長尾崎行雄序・国民新聞社長徳富猪一郎題賛）博報堂，明42<YDM41628>（『近代日本青年期教育叢書 第4期（苦学・独学論）』第4巻，日本図書センター，1992<F5-E2>に復刻収録）は，上京者が注意すべき新聞広告を利用した詐欺の一種として「渡米周旋」を挙げている（「近頃青年間に渡米熱の高くなったのを利用して、渡船免状を貰って遣るの、渡米させて遣るのと旨いことを云ふて金を取る詐欺手段である…多く空想に燃えた青年が引つかゝるのである。一体渡米は非常に面倒な手続きを要するので…渡船免状は左様に安々と取れるものでない。…非常な法螺を吹き、三十銭も五十銭も会費を毎月払はせて、下らぬ雑誌を売りつけたりしてゐる奴等もある。」pp.31-32）。また島貫兵太夫は，新聞配達・牛乳配達・羅宇のすげ換えなどの「旧苦学法」を後篇に付した『新苦学法』警醒社，明44<YDM49071>（上掲『近代日本青年期教育叢書 第4期（苦学・独学論）』第5巻<F5-E2>に復刻収録）刊行の理由を以下のように述べている（「坊間鬻ぐ所の苦学に関する書籍は少なくないけれども、著者が之をを関するに、其多く

は空想に於て行はるゝも、事實に於て行はれない種類のものが多い。…苦学志望者に対して其の偽なき、真実の苦学法でしかも世界的のものを知らしむると云ふ事は、之れ亦必要欠く可からざる所のものであると思ふ。…著者が此著書に対して、今流行のお可笑しな名目を附して出板(ママ)すると云ふ事は、ありもしない苦学生の財布を絞り取らんとするが如く見らるゝ所があるかも知らないけれども、…只それ利を思ふ世の著述とは、聊異るところがあると…」(pp.1 - 3)。島貫は、本書のなかで「新苦学法」としての「海外発展」及び(より多くの金を速やかに得る方法として)「渡米」を勧めている (pp.114 - 117, 175 - 178)。

小川利夫・寺崎昌男監修『近代日本青年期教育叢書 第4期(苦学・独学論)』全16巻、日本図書センター、1992<F5-E2>は、明治以降の苦学案内書・独学案内書など18点を復刻収録する。

- 33) キンモンズ『立身出世の社会史』は、「『成功』は明治後期における立身出世観 (thought on self-advancement) を表すサンプルとして他の雑誌(『実業之日本』『中学世界』、筆者補注)より利用価値をもっている。」と指摘する (p.158)。
- 34) 国立国会図書館で所蔵する成功雑誌社の刊行物(図書)は、マーデン『運命開拓策』1907.9(明36)<YDM9120>から、堀内新泉『立志小説 帰郷記』(縮刷版)、1921(大10)<26-417イ>まで58件、その内容は概ね次のとおりである。

【立志・偉人伝：明36～】 マーデン『運命開拓策』(世界成功文庫第1編)『猛志と成功』/ルーズバルト『奮闘の生活』『亜米利加魂』『鉄騎隊』/『世界大富豪立身伝』/村上俊蔵『東郷大将詳伝』/アンリー・ズー・ヌーサンス『現世界鉄腕王独逸皇帝』/石井研堂『中村正直伝』/堀内静宇『維新百傑』/戸川残花『海舟先生』/長田偶得『偉人日記』『狸爺家康』/吉田俊男『天下之快傑頭山満』**【立志小説：明38～】** 堀内新泉『人の兄』『帰郷記』『観音堂』『血写経』『逆境の勇士』『人一人』『学生心学』『汗の価値』『此父此子』『唯一氣』『人の妻』『故郷』『帰郷記(縮刷版)』/米光関月『礦山王』**【処世・受験・成功術：明39～】**『現代名家作文秘訣』/シャルル・ワグネー『現代青年活動要訣』/村上俊蔵『現代受験法』/勝峰大徹『内観法』/松村介石『真生涯の礎』/美土路昌一『二宮尊徳勤儉貯蓄法』/渋沢栄一『実業訓』/島田三郎『新論語』/前田定之介『英語演説法』**【少年・冒険物語：明39～】** 米光関月『短刀英雄』『少年水滸伝』『礦山王』/江見水蔭『無人島』/久保任天『世界無銭旅行』/三津木春影『日本青年亜非利加猛獣国探検』/野村大濤『日本青年海底大探検』/飯村辰之助『黒熊自伝』/覆面浪人『現代支那四百余州風雲児』/三島霜川『月島丸の行衛』**【移殖民案内：明41～】** 鎌田三之助『墨士哥殖民案内』『北米墨士哥殖民案内』/横山源之助『南米渡航案内』**【その他】** 村上俊蔵『世界近代大博覧会写真帖』/幸田露伴『小品十種』/白

隠禅師『碧巖集秘鈔』

- 35) 例えば、西川光二郎「成功の人失敗の人」(1巻1号)、片山潜「渡米希望者に告ぐ」(2巻2号)ほか、安部磯雄「如何にして失敗を避く可き乎」(2巻3号)ほか。キンモンズ『立身出世の社会史』pp.159 - 161参照。片山が『成功』に執筆した記事は以下のとおり。「渡米希望者に告ぐ」(2巻2号)「米国テキサス最大成功者岡崎常吉君立身伝」(8巻5号)「北米シャトル活動家西居君事業」(8巻6号)「北米富源と無資力者成功」(9巻2号)「赤手渡米者成功法」(9巻3号)「渡米者海外旅券入手法」(9巻4号)「米国テキサス移民者心得」(9巻5号)「北米西海岸成功者古屋君発展履歴」(9巻6号)「最近米国西海岸の本邦人活動」(10巻2号)「最近北米渡米法」(11巻3号)「最近渡米事情」(12巻1号)「英領加奈陀出稼心得」(12巻4号)「新渡米者心得」(13巻1号)。上掲今井(桑井)「明治期における渡米熱と渡米案内書および渡米雑誌」pp.340 - 341参照。
- 36) 「特別賛成員」リストに掲載された人々は、徳富蘇峰・井上円了・志賀重昂ら民友社及び政教社のグループ、幸田露伴・巖本善治(クリスチャン・女性教育指導者)・村上专精(信州の牧師)。「名誉賛成員」には加藤弘之・海老名弾正・井上哲次郎・松村介石が名を連ねていた。キンモンズ『立身出世の社会史』p.161参照。ほかに執筆者は、尾崎行雄(罌堂)・大隈重信・新渡戸稻造・頭山満・三宅雪嶺・内村鑑三・鳥居龍蔵・岩野泡鳴・泉鏡花・小林富次郎(ライオン歯磨創始者)等々。
- 37) 桑井「日米両国の成功雑誌に関する一考察」p.105参照。38) 主筆高橋山民(直臣)は『殖民世界』創刊の趣旨を、次のように述べている。(国会図書館所蔵『殖民世界』創刊号は当該部分欠落のため、以下の引用は、上掲和田敦彦のホームページ掲載テキストを使用した。)[「…国内の状況如何と顧れば、人口は日々に増殖して人々職を獲るに窮し、物価は月々に騰貴して、萬衆生計の困難を訴ふ、…翻つて海外の地を覩ば如何、萬里の郊野徒に横りて、人の来り耕さんことを俟ち、千里の長江空しく流れて、我の来りて其岸に商工業の旗を翻さんことを待つ、…噫時は来れり、我が国民が殖民すべきの時は来れり、…盛くに海外に活動して島帝国の富力を増進すべきの時は来れり、余輩は茲に時勢の要求に応じて本誌を発刊す、若し之に拠りて、我が帝国民が武力的戦争に依らず、平和的戦争に依りて、欧米の列強に劣らざる富力をばいようするの一助ともならば、何の幸慶か之に如んや。】(『殖民世界発刊の主旨』)
- 39) 上掲和田「〈立志小説〉の行方 — 『殖民世界』という読書空間」は、『殖民世界』における「南米イメージの生成」「植(殖)民の動機づけとレトリック」を同時代の言語状況のなかで考察し、『成功』の言説(立志・成功)と『殖民世界』との連関性を、堀内新泉「立志小説」「殖民小説」に焦点をあて分析する。
- 40) 「殖民世界懸賞『美人国』考物」(各記載により名称に異同あり)とは、中央に配された「結婚前の男」とそれを取り囲む「十四美女」の関係(許婚・妹・

最初の恋人・電車で遇った美人等々)を当てるもの。その考案要領に「凡そ殖民せんとする者は宜しく其殖民地に夫人を携帯すべし、…是に於てか、本社は此美人国考物を提出して世に問ふ」という最も奇抜にして趣味に富める懸賞。第一等から第百三等まで、上等銀側時計から『殖民世界』三個月分まで、賞品の行方は杳として知れない。

- 41) 表紙キャッチコピーの僅かな変化にも、『殖民世界』編集方針の揺れが現れていたのかも知れない。1 (1) : 「本誌は (以下省略) 海外奮闘家唯一の伴侶也 (以下省略)」「世界的実業家必読の雑誌」, 1 (2) : 「海外事業家唯一の伴侶 海外渡航者唯一の益友」「世界的実業家必読の雑誌」, 1 (3 - 4) : 前号と同じ, 1 (5) : 「本号には斬新奇抜なる大懸賞「美人国」用箋添付」
- 42) 「日本移民協会」については、間宮國夫『「対米啓発運動」と日本移民協会の設立』早稲田大学社会科学研究所日米関係部会『黎明期アジア太平洋地域の国際関係：太平洋問題調査会 (I.P.R) の研究』早稲田大学社会科学研究所, 1994 (研究シリーズ 33) pp.155 - 181 <A76-E86>が、殆ど唯一の研究であり、日本移民協会の設立を「北米移民問題」との関連で検討する。排日運動と日本外交の対応については、麻田貞雄『兩大戦間の日米関係 一海軍と政策決定過程』東京大学出版会, 1993 (「第六章 人種と文化の相克 一移民問題と日米関係」 pp.273 - 328) <A99-ZU-E135>が詳しい。高橋勝浩「大正二 (一九一三) 年カリフォルニア州排日土地法と日本の『対米啓発運動』」『國學院法研論叢』17 : 1990.3, pp.89 - 127 <Z2-801>も参照のこと。ハワイにおける奥村多喜衛の「排日予防啓発運動」につき前掲、『参考書誌研究』No.54, pp.88 - 89 及び注) pp.117 - 118 を参照のこと。大隈重信の「東西文明調和論」について、間宮國夫「大隈重信と人種差別撤廃問題 ——一九一九年パリ講和会議との関連において」『早稲田大学史紀要』21 : 1989.3, pp.213 - 237 (生誕 150 年記念大隈重信研究論集<特集>) <Z7-327> (本特集号を単行本化した、早稲田大学大学史編集所編『大隈重信とその時代 一議会・文明を中心として 一 大隈重信生誕一五〇年記念』早稲田大学出版部, 1989, pp.213 - 237 <GK114-E13>に再録), シンポジウム記録『「東西文明調和論」をめぐる大隈重信と浮田和民』同志社大学人文科学研究所編『自由の風土・在野の精神 一近代日本における同志社と早稲田 一 人文科学研究所創立 50 周年記念シンポジウム』同志社大学人文科学研究所, 1995, pp.33 - 42 (人文研ブックレット No.2) <FD4-E324>, 「大隈重信と『移民問題』」『社会科学討究』42 (3) : 1997.3, pp.1103 - 1122 <Z6-289>を参照。パリ講和会議と日本の政策については、上掲間宮「大隈重信と人種差別撤廃問題」注 (2) 掲出文献を参照。また、細野浩二『「脱欧」論としての東西文明融合論 一 大隈重信の対外論とその一展開』『史観』100 : 1979.3, pp.79 - 91 <Z8-326>, 神谷昌史『「東西文明調和論」の三つの型 一 大隈重信・徳富蘇峰・浮田和民』『大東法政論集』9 : 2001.3, pp.159 - 180 <Z2-B594>も参照のこと。大隈に関する研

究誌として、早稲田大学大隈研究室編『大隈研究』1-7:1951-1956<Z210.6-O1>がある。『大隈研究』は、1955年「大隈研究室」が大隈記念「社会科学研究所」に統合されたのに伴って、『社会科学討究』に吸収合併された。中村尚美「大隈研究の回顧と現況」上掲『大隈重信とその時代』pp.3-25は、『大隈研究』の評価も含め、大隈研究史を整理する。

- 43) 国立国会図書館では『日本移民協会報告』第1が欠号のため、当初の「設立趣旨」を確認することができなかった（『日本移民協会報告』は、明治新聞雑誌文庫で第1-13を所蔵、北海道大学附属図書館が第7,9-16を所蔵）。『明治新聞雑誌文庫目次総覧』に拠ると、第1の記事内容は以下のとおりである。「日本移民協会設立趣旨」「日本移民協会之事業」「日本移民協会は何をするか」「創立総会」「会頭推薦」「第一回総会」「事業開始」「隠れたる賛助者」「日本移民協会規約」「役員」「会員名簿」。「設立趣旨（一次）」につき上掲間宮「『対米啓発運動』と日本移民協会の設立」p.160を参照した。
- 44) 日本移民協会が編集・刊行した主な出版物は次のとおりである。日本移民協会調査部編『最近移植民研究』東洋社、大6<376-19>、『最近移植民研究第2上』東洋社、大7<376-194>、『海外発展指針』東洋社、大7<31-659>、『伯刺西爾』東洋社、大6（海外叢書）<327-956い>、『比律賓』東洋社、大7（海外叢書）<327-956ろ>、日本移民協会編『海外移住』日本移民協会、大12<512-202>、ド・エツカ、宮尾舜治訳『平和なる海外発展地モザンビク』日本移民協会、昭3<579-168>
- 45) 主な役員は次のとおり（括弧内は主な経歴）。井上通泰（御歌所寄人）・井上角五郎（日本製鋼所会長）・新渡戸稲造・小川平吉（東京弁護士会長）・鎌田栄吉（慶応義塾々長）・高田早苗（早稲田大学々長）・内田嘉吉（台湾総督府民生長官）・柳田国夫・志賀重昂・末広重雄（法博）・元田肇（通信大臣）
- 46) 上掲注44)の出版状況からすれば、日本移民協会そのものは、昭和3年には、まだ、活動していたことになる。

(じん しげじ 調査及び立法考査局議会官庁資料調査室)